

の主張せし説にして、概念は之れに屬する個々の觀念の總稱に過ぎず、故に是等個々の觀念の外に概念に對する一種特別の客觀的實在存することなく、個々の觀念を一一排除するときは、終に概念も亦自ら消滅すと云ふ。

例へばボルクリーの説の如き是れなり。第三概念論は近世尙ほ勢力ある説にして、概念は心の中に存する一般觀念たるなり。されば唯名論者の如く個々の觀念のみを認めて、一般觀念を否定するものにあらず、又實在論者の如く一般觀念を客觀的實在となすものにもあらざるなり。

以上三種の見解の中何れの説眞なるかを論結せんとするが如きは、目的とする所にあらず、唯是等の論者が各々説をなすに方り、其の意識上に現はれたる概念の状態如何ありしかを

推察し、之れを指示するを以て足れりとすべし。惟ふに實在論者及び概念論者は、初發概念若くは精練概念を主とし、唯名論者は交代概念を論據としたるも、如し。

上來概念につき先づ其の外延と内包との關係を論じ、次に概念の三種を別ちて述べたりしが、最初の外延と内包との關係は、概念の發達中に生ずべき一種の關係に關し、次の三種の概念は、一既成概念が意識に現はるゝ變化の状態を指示したるに過ぎず。されば概念の起源即ち其の構成法につきては、未だ論ずる所あらざりしなり。

然らば概念は如何にして生ずるかと云ふに、他なし、抽象作用によるなり。詳言すれば諸物の觀念につき、其の中の相類したる部分即ち共通の要素を抽象し、之れを總括する所より生

ず。故に概念は又一に總合作用によるなり。且又相類したる部分を認めんが爲めには、是等の部分を互に相比較するを要すべし。従つて、概念構成中には又比較作用を含むものとす。

## 教授上の注意

總て事物を説明せんとするは、其の概念を明にせんとするにあり。而して概念を明にするは即ち定義を與ふることに外ならず。物の定義を與へんとせば、其の物の屬する種の語を擧げ、且つ同種類中の他の物より區別すべき特質を擧ぐべし、之れ定義を與ふる一般の規則なり。説明なるものは説明を與ふる者より云へば、概念の分解にして、説明を受くる者より云ふときは總合作用となる。嘗

て一青年あり、法律の保護といふ意義了解し難しとて説明を乞ふ。茲に於て著者例説して、或る人君を何の理由もなく毆打せんとするか、或は讒謗罵詈せんとするに方り、巡査に之れを訴ふるときは、巡査は其の亂暴人を制止し君を保護するならん、之れ法律の保護の一例なりと云ひしに、青年は了解して満足を表せり。法律の法護と云ふが如きは抽象的概念なるが故に、此の概念の中に含まるゝ卑近なる或る特別の場合を示したるなり。されば著者より云へば概念の分解にして、青年より云ふときは、巡査が法に依つて保護を與ふるは猶ほ親が慈愛に依りて彼等を保護すると一般なり。故に此の類したる場合と總合生じ、遂に法律の保護といふことを了解したるなり。又例へば露西亞がコン

スタンチノールを占領せんとする時は、列國殊に英國干渉を試む。今此の事實を説明せんが爲め、之れ勢力平均の主義より起ると云はんか、之れのみにては其の概念不確實なり。茲に於て西班牙の王位繼承の争亂の始末を語り、之れも亦勢力平均の主義より起れりと説明するとき、確實なる概念を得べし。此の場合に於ても説明者より云へば、勢力平均と云ふ概念の中に含まるゝ或る特別の事實を分解して示したるものにして、青年より云へば相類したる場合を總合して始めて其の概念確實となり、能く之れを了解したるなり。概して云ふときは事物を説明せんとするに方りては、對者の智識經驗の程度に應じて或る特別なる場合を提示し、之れを總合せしむるを自然の順序なりとす。

## 第十五章 判断作用

論理學に於て同一法なるものあり。同一法とはAをAとなすが如き作用を云ふ。何故に之れを法と唱ふるかと云ふに、一切の論理的思考は結局AをAとなすが如き同一作用に歸着するが故に、同一作用は普く論理的思考に通ずと考ふるを得ればなり。詳言すれば總て論理的思考は、判断作用に基くものにして、判断作用は即ち同一作用なるが故に、一切の論理的思考は亦同一作用によりて支配せらると云ふの思想より起りたるなり。

然れども抑判断作用は、同一作用なるや否や、之れ議論の存する所なるべけれども、今之れを同一作用と見做すときは、判断

作用は觀念と概念若くは概念と概念とが同一法にて結合する作用なりと云ふを得べし。蓋し判斷作用にて同一にせらるる所の要素は、觀念と概念となるか或は概念と概念となればなり。例へば「此は水晶なり」との判斷に於ては「此なる物は觀念にして「水晶」は概念なり。設し又「鯨は獸類なり」との判斷に於ては「鯨」も「獸類」も共に概念たるなり。然り而して判斷には主賓の二要素あり。今之れを前の例にて云へば「此」と「鯨」とは主にして「水晶」と「獸類」とは賓なり。判斷の種類は是等の主辭と賓辭との種々の關係適否、有様、條件等を云ふ及び主辭の數量等より生ずるなり、但し是等の區別は論理學上の區別なりとす。

前に判斷作用を同一作用なりと假定したりしが、同一作用に

は直接と間接との別あり、又全部と部分との別あり、理論上にては何れも同一作用たるを得べしと雖も、實際に於ては同一作用とは感ぜざる場合あり、之れに基き同一作用なる語を除きて定義を下すときは、判斷は觀念と概念との關係若くは概念と概念との關係を定立する作用なりと云ふを得べし。直接同一作用とは「此は机なり」と云ふ判斷に於けるが如く、主賓共に明瞭なる爲め、二者の結合直接に行はるゝを云ふ。而して「此」と「机」との結合は又全部同一作用たるなり。然るに「衣服は寒暑を防ぐ爲の物なり」との判斷に於ては、主賓同一にあらず。何となれば衣服は寒暑を防ぐ爲の外、又裝飾品たるを得べきものなり。されば斯の如き判斷に於ては、只部分的同一作用行はれ居るものとす。然れども寒暑を防ぐ

を以て衣服の第一の目的となし、之れを必然の内包と考へ、他を附屬の内包と見做すときは、此の判断も亦全部同一作用にして、其の主と賓とは只言語上の相違に過ぎざるなり。次に「鯨は獸類なり」と云ふが如き判断に於ては、同一作用行はるゝこと勿論なれども、其の同一作用たるや、直接に行はるゝにあらず。何となれば鯨の獸類なることは、生物學上の觀察を経て始めて判定せられたるものにして、通常一般の觀察には知るを得ざることなるが故に、畢竟研究の媒介によりて間接に生じたる同一作用なればなり。然り而して斯の如き同一作用は、概念の内包に變化を與へ、以て之れを精練せしむるものとす。

判断作用は概念作用より獨立せるものにあらず。判断は單

に概念の適用なるか、或は其の分解に過ぎざることあり、此は「机なり」との判断の如きは、物象に對し「机なる概念を適用したるに過ぎず。又「衣服は害暑を防ぐ爲めの物なり」との判断の如きは、已に衣服なる概念中に含まれたる内包が、其の一部分分解せられたるに外ならず。

設し又「鯨は獸類なり」と云ふが如き間接判断に至りては、概念と一層密接の關係を有し、概念構造作用の一部分となるなり。通常世人の所謂判断とは、斯の如き間接判断を指すものにして、多少遲疑すべき事情の存する場合に限らるゝと雖も、判断作用の本性より云ふときは、直接に行はるゝ同一作用も亦、判断たるを失はざるなり。

知覺作用と雖も、其の中には已に判断作用行はる。蓋し事物

を知覺するは、外部の刺戟と之れに關する舊觀念との結合より生ずるものにして、而して此の結合たるや、刺戟と舊觀念との二者に共通の要素の聯合なるが故に、斯の如き聯合作用の生ずるには、聯合すべき共通の要素を認むるの判斷作用を要す。斯の如き判斷作用は、極めて直接に行はるべき無意識的作用にして、潜在判斷とも稱すべきものなり。之れより判斷作用漸次間接となるに従ひ、意識的となり、活動的となる。之れ顯在判斷なり。是等の差異は程度の差異なるが故に、假令潜在判斷と雖も結局判斷たるを失はず。されば判斷作用は概念作用に行はるゝに止まらず、單一なる知覺作用にも行はるが故に、あらゆる知的作用に行はるべき共通の作用なりと云ふべし。

近年思想過程の研究盛んに行はれ、其の結果として思想要素なるものあり、こは感覺及び單純感情と並立すべき一種の新要素なりと主張するもの起れり。彼等は判斷作用を實驗的に研究したるに、如何に分解の歩を進むるも到底分解するを得ざる一種の意識あり、而して之れ判斷作用のみならず、概念にも存し、非感覺的にして何等内容なき而も確實なる意識なりと云ふ。本著者の經驗より云ふときは、各判斷及び各概念には總體觀念なるものあり、代表的觀念にして、其の代表の形式たるや、人々によりて異なれり。且つ或る人には視覺上の心像となり、又或る人には言語の聽覺上の心像若くは運動の心像となりて表る。視覺上の心像となりて表るゝものには、前記の如き非感覺的無内容の要素は之れを認むること固よ

り不可能なり。假令他の二種の心像にても斯る要素は認め難し。總體觀念も亦過程にして、之れによりて事物を大體に理解するを得るなり。

### 判断の相對性

判断の相對性は感覺の強度の判断に於て最も確實に證明するを得。例へば激流に近き所にて友人と對話すとせよ、先づ通常の音調を以て始むべしと雖も、語句の相通せざるを覺へ、漸次音聲を高め、終に語句の漸く相通するに至りし頃には、意外に大聲となりるを知るべし。設し歸宅後室内靜かなる所にて斯の如き音聲にて談話を試みなば、隣家のもの喧嘩爭論にてはあらずやと怪む程なり。又街頭の點燈を見るに、太陽の未だ全く没せざる時にありては、唯其の火焰を見るに

止まり、特に光輝を感ずることなし。然るに夜間の暗黒中にありては、光輝を放ちて四邊を照すにあらずや。斯の如く感覺の強度の判断は、絶對的にはあらずして相對的なり。此の相對性を實驗的に研究したるものを精神物理の法則又はフエヒネルの法則と云ふ。感覺をして算術級數の割合にて増加せしめんが爲には、刺戟は幾何級數にて増加せしめざる可からずと云ふもの、即ち之れなり。或は又之れを感覺は刺戟數量の對數の如くに消長すと云ふを得べし。

判断の相對性は知的作用に止まらず、感情及び努力の方面に於ても亦之れを見るなり。美食に馴れたるものに取りては美味にあらざるものも、粗食家には珍味の快感を與へ、勞苦に馴れたるものが意に介せざる仕事も、殿上の貴公子には到底

堪へざるが如き之れなり。

概念の判断に及ぼす影響

概念の有無及び相違は、同一の對象につきても其の判断に於て差異を生ず。而して對象の種類により此の變化の程度にも大なる差等あり。感覺の質の如きは概念の如何に拘らず殆ど變化なしと雖も、知覺上の識別より情意の各方面に於ては變化の程度著しきものあり。茲に大小二個の物體あり、同一種類の物體にして各五十五グラムの重量なれども、容積に於ては甲は乙の二倍なりとせよ。今之れを掌上に上げ兩者の重量を比較するに、乙は甲より重く、約二倍の重量なりと判定すべし。之れ大なるものは小なるものよりも、重しとの概念あり。乙は甲よりも輕からんと豫期したりしに、乙は意外

に重く甲は意外に輕きに由るなり。又顯微鏡にて物を觀察するに、或るものには見へ、他のものには見へず、又假令見ゆるも異なりて見ゆることあり。之れ主として觀察者の概念の有無又は其の相違より生ず。更に之れを複雑なる方面につきて云へば、例へば所謂精神教育の概念の如き、之れを有せざるか又は之れと反對の概念を有するものには、精神教育家なるもの一種奇異なる人物と感ぜられ、事々に不調和を感ずるが如し。其の他、人生又は處世の概念の相違より甲者の是認する所も、乙者の非認する所となることあり、之れ人の熟知する所なり。されど概念の影響の最も著しきは、蓋し美術の鑑定に於て之れを見るを得べし。又概念は行爲の反應に變化を生ず、即ち概念狭きに過ぐるときは應ずべき時に應ぜず、概



念茫漠たるときは、反應不規則にして理想と矛盾を生ずるが如きことあるべし。

### 第十六章 意識の状態

意識は個々の精神作用と異なれる一種特別の状態にして、猶ほ劇場の舞臺の如く、個々の精神作用は之れに登りて藝を演ずる俳優の如し、俳優皆退きたる後にも尚ほ舞臺の存する如く、個々の精神作用の消失したる後にも尚ほ意識なるもの存すと云ふ説あり。斯の如きは陳套に屬し、更に評論するの價値あるなし。

又意識の外に別に無意識の存在を唱ふるものあり。されども無意識なるものは、吾人の直接の經驗にあらず、其の何物た

るかは確知するを得ず、従つて此の事たる物質作用を論ずる物理学の外、心理学に於ては無意味の語に過ぎざるが如し。されども或る點より考ふるときは全く之れを無視することを得ず。即ち例へば就寢前纏まらざりし思想が翌朝に至り容易に整頓することあり。之れ精神状態の爽快なるにも由るべしと雖も、只之れのみにては説明するを得ざる場合あり。斯の如き場合に於ては睡眠中の腦隨作用が翌朝の精神作用を助けたるものと見做さざるを得ず。されば無意識的生理作用は、意識的精神作用と酷密の關係を有すと云ふべし。是れに由りて觀れば意識作用の事を考ふるに方り、無意識作用を云々すべき必要あるを知るを得べし。

或は又意識状態と純然たる無意識状態との間には、孰れにも

屬せしめ難き一種の状態なかる可からず。斯の如きは極微の意識状態にして、之れを無意識と稱することあり。然れども固より無意識なるものは、意識と對峙すべき一種特別の存在にあらず、抑意識なるものも亦前に述べし一派の論者の云ふが如き一種特別の存在にあらず。舞臺は俳優退去したる後尙ほ存すと雖も、意識は之れと異なり個々の精神作用消滅するときは、之れと共に直に全滅するものとす。されば意識其の物につきての研究よりも、意識の範圍につきての研究重要となるなり。然り而して意識の範圍には、同時と繼續との別あり。同時範圍とは一瞬間に現れたる精神經驗の總和を云ひ、繼續範圍とは一の統合的状态に於て意識さるべき精神經驗の占有する時間を云ふ。繼續範圍につきては、時間知覺

の條下に於て已に之れを説述したり。

夫れ意識の範圍内には幾多の精神作用現るべしと雖も、其中には分明なるものと、不分明なるものとの別あり。其の状恰も網膜の中央小窩に映ぜしものは分明にして、之れを遠かるに隨ひ漸次不分明となると一般なり。知覺の場合に於ては、實際感覺機官の部分の異なる所より此の區別を生じ、想像及び思考作用に於ては主として中樞状態より生ずれども、多少は外周の感覺機官の部分の相違と觀念との關係による所あるが如し。

然りと雖も、分明不分明の差異は、必ずしも感覺機官の部分の異なる所より生ずるにあらず。別に又之れを生ずべき作用ありと考へざるを得ず。即ち觀念聯合の行はるゝと行はれ

ざるとは、此の差異を生ずべき一大原因たるなり。例へば新聞紙の廣告欄を一見すとせよ。其の中の或るものは特に注意を惹きて分明となり、他のものは同じく中央小窩に映ぜしと雖も、茫漠として過ぎ去り、敢て注意を惹かず、確に認識する所とはならざるべし。而して其の中分明となりたるものにつきて稽查するときは、其の物たる必ず深く閱覽者と關係を有するものにして、随つて之れに關する事物の觀念續々浮び出で、廣告中の文字と結合したるを見るべし。一派の心理説によれば、斯の如く分明ならしむる作用を統覺或は明覺作用と稱し、觀念聯合とは異なれる一種特別の作用なりと云ふ。然れども著者の見る所によれば、前記の場合に於て意識内容の明瞭となるは觀念聯合作用に外ならず。意

識内容を明瞭ならしむるには、純然たる聯合作用即ち所動作用によるものと意志作用の加はれるものと別あり。意志的聯合作用必ずしも内容を明瞭ならしむるにあらず。却て多くの場合に於ては所動作用によるなり。唯意志は目的を有し撰擇作用を行ふが故に、思想を統一し、以て内容との關係を明瞭にす。之れ直接の作用なり。又間接には統一が補助となりて内容其のものを明瞭ならしむ。

#### 意識の範圍と綜合作用

實驗の結果によれば、一瞬間に認識し得べき刺戟の數は、視覺の場合には四個乃至六個なり。而して刺戟物の種類に關しては、點、線、幾何學的の圖、數字、假名、等何れを用ゐるも結果に於て大差なし、されば四個乃至六個の認識は意識の同

時範圍なりと云ふべし。而して繼續範圍は前に述べたる如く三、六秒乃至十二秒なり。總て認識上の直接の綜合は、斯の如き少數の刺戟物に限られ、短少の時間内に行はるべきものなるが故に、夫れ以上の時間を要し、又は夫れ以上の刺戟物の數を含む綜合作用は、直接にはあらずして、記憶の補助によるか或は認識を反復せざる可からず。故に甲と乙との二點を連結する線と、丙と丁との二點を連結する線との長短を比較するは、甲乙丙丁を四點として認識するよりも遙に困難なり。又七八才の兒童に暗算の珠算又は筆算よりも困難なるは、記憶によりて綜合作用を補助する必要あるが爲なり。意識の範圍と綜合作用の發達との關係は、好個の研究問題なりと云ふべし。

### 第一節 興味と明覺作用との關係

興味は一面に於ては感情なりと雖も、他面に於て之れを生ずべき要件に至りては、明覺作用の存する所に生ずるものにして、假令事物を見聞するも之れに連れて觀念活動せざるときは、何等の興味をも生ずることなし。

或人亞弗利加内地の土人を伴ひ、英京ロンドンの盛況を遊覽せしめしに、只其の奇異なるに感じ、呆然として毫も興味を覺へざりしが如しと云ふ。之れ彼の土人の生活狀態及び外圍の有様が、文明都市の狀況と全く異なれるが爲め、之れを見るも想像作用及び思考作用等の如き觀念の活動を惹起することなく、其の狀恰も偶然物を拾ひ取りしものあり、其の何物たるかにつき想像だもなすこと能はざるが爲め、無用無意味の

ものとなり、何等の興味をも生ぜざると一般なり。之れに反し圍碁の場合に於て興味著しきものあるは、攻守の懸引又は局面轉化等につき、觀念の活動活潑にして、其の聯合作用盛んなるによるなり。

斯の如く興味は活動的聯合作用より生ずるものなるが故に、始めに興味を生ぜし事物と雖も、之れを見聞すること久しく、終に習慣となるときは、一切興味を生ぜざるに至るべし。例へば始めて珍奇なるものを得たる當時にありては、種々の觀念活動し聯合するが故に、興味著しかるべしと雖も、後ち之れに見馴るゝときは、殊更には觀念活動せず、従つて平凡の物となり、興味を惹起せざるが如し。之れ兒童の玩具に對する興味につきて明に見る所なり。尙ほ興味感情につきては、後

に知的感情を論ずる條下に於て多少説述する所あるべし。

### 第十七章 注意

夫れ注意は明覺作用と密接の關係を有するものにして、注意を與ふるが爲に事物分明となると云ふを得べく、又之れを一方より考ふるときは、明覺作用行はるゝが故に注意を惹起すと云ふを得べし。畢竟注意と明覺作用とは、同一事實の二方面たるなり。

注意は又興味と同様の關係を有するものにして、嘗に興味あるが爲に注意を惹起するに止まらず、最初興味を生ぜざりし事物と雖も、強て注意を與へしが爲に漸次興味を喚起する場合往々之れあるを見るなり。

斯の如く注意と明覺作用と興味とは、互に酷密の關係を有すれども、注意には受動的或は所動的注意と活動的或は能動的注意との別あり。只其中能動的注意のみ上述の關係を有すと知るべし。

所動的注意とは外部より促されたる注意を云ふ。例へば友人と餘念なく談話し居るに方り、突然強烈なる電光を見て直に之れに其の氣を奪はるゝが如き之れなり。

所動的注意を惹起すべきものは(一)非常に大なるもの、(二)比較的強烈なるもの、(三)性質上一種特別なるもの等なり。されば之れを總括せば、他のものより一段異なるものこそ即ち所動的注意を喚起するに足るべきものと云ふ可けれ。白色の文字中に赤色の文字を挟み、或は五號活字中に少數のゴヂツ

ク又は四號活字を加へて印刷し、或は一段音聲を張り上げ、或は又一段光氣を強くするが如き、之れ皆先づ所動的注意を惹かんとするの手段に外ならざるなり。

能動的注意とは所動的注意と異なり、外部より促さるゝにあらずして、自己より求めて集注する状態なり。而して之れを大別して二種となすを得べし。一は積極的にして自ら好みて集注するを云ひ、他は消極的にして必要に迫られて強て義務的に集注するを云ふ。前者は快感を與へ、後者は不快感を與ふべし。世人往々消極的能動注意を受動的注意と稱すれども、之れ謬見たるを免れず。但し活動的聯合作用の行はれざる點に於ては、受動的注意と異なることなし。

次に注意状態の特徴如何と云ふに、注意には前に述べたる如

く、活動的と受動的との別ありて、活動的注意にありては之れを與ふるもの即ち注意の主或は其の形式と注意を受くるもの即ち其の客或は注意の内容との二方面あり。今其中注意の主の方面を説述せんとするときは、勢ひ自己識に論及し、意志論にも亘らざるを得ず、然るに斯くするときは議論複雑となり、爲に明瞭を缺くの恐れあるが故に、茲には只内容の方面のみより考ふべし。

注意は之れを内容の方面より考ふるときは、活動的なると受動的なるとに拘らず、其の根本的特徴に於ては大差あることなく、其の差異たる只程度の差異に過ぎざるなり。注意の根本的特徴は、第一、禁止作用行はるゝこと、第二、精神状態の比較的單一となること是れなり。

注意は之れを其の内容の状態につき、比喩詞を以て云ふときは、一個若くは少數の精神現象が、他の精神現象を凌駕して獨り意識界を占有し居る状態なり、換言すれば注意を惹きたるものゝみが跋扈し、他は之れが爲に厭倒せられたる状態なり。之れ畢意排他状態に外ならず。然るに斯の如きは、他の精神現象の發現を拒絶するものなるが故に、又之れを禁止作用と稱するを得べし。例へば此所に天地玄黄宇宙洪荒なる八字ありとし、其の中の字の字及び其の上下の黄宙の二字注意を惹きたりとせんか、是等三文字が明瞭となり、意識の中心となると同時に、他の文字は意識上明瞭には發現せざるべし、之れ即ち前三文字の爲に壓倒せられ、其の明瞭なる發現禁止せられたるなり。

斯の如く管に精神上の禁止作用行はるのみならず、身體及び其の局部に於ても亦禁止作用行はれ、妄りに動搖することなかるべし。其の故如何と云ふに抑注意の生じたるときは、此の注意の状態に相當すべき一定の態度なかる可からず、設し所要の態度を缺くときは、注意を持續せしむること能はざるべければなり。例へば字黃宙の三文字注意を惹くときは、頭首及び眼球一定の位置を占むべし、然るに今設し頭首の方向を移轉せしむるか、或は眼球を回轉せしむるが如きことあるときは、他の文字漸次發現し、注意爲に移轉せざるを得ず。されば注意の状態に禁止作用の行はるゝこと、必然の理なりと云ふべし。

次に注意は精神状態を比較的に單一となすの性質を有す。

之れ注意の集注せざるときは、種々雑多の事物交々現るべしと雖も、一旦注意生ずるときは、之れを惹きたるものゝみ意識界を占有するが故に、當時の意識界の内容減少するによるなり。然れども此の點に於ては能動的注意は、所動的注意と大に異なれり。

能動的注意に於ても亦注意を受くべきもの少數なるが故に、比較的單一なる状態なりと雖も、注意を惹きたるものに關する諸種の觀念聯想せらるべきが故に、所動的注意の如き單一なる状態にあらず、從つて禁止作用も亦嚴格には行はれざるなり、されども一定の事物に専心一意となり、妄りに種々雑多の内容を現せしむることなき點に於ては、禁止作用行はれ、意識の状態亦單一となるや、蓋し争ふ可からざるなり。されば



能動的注意の所動的注意と異なる所は、只程度の差異に過ぎざるなり。然り而して身體及び其の局部につきて云ふも、能動的注意に禁止作用の行はるゝこと容易に觀察するを得べし。顯微鏡に向ひ微細なるものを觀察する所の研究者の態度を見よ、其の靜肅なるが如き亦其の一例なりとす。

夫れ注意の性質の禁止的なること及び其の状態の比較的單一なることは、以上述べたる所なるが、今更に之れを換言するときは、注意は意識の活動及び變化に制限を加ふるものと云ふを得べし。然るに意識なるものは其の性質上活動を要し、變化流通を常態となすものなるが故に、注意の状態とは相容れざるなり。之れ殊に消極的注意に於て然るなり。故に消極的注意は漸次意識の衰弱を來し、終に睡眠を催さしむるに

至るべく、從つて永くは之れを持續せしむるを得ず。

積極的注意にありては幾多の活動行はるゝが故に、意識を衰退せしむること尠しと雖も、之れ亦到底永く持續せしむることを得ず。時々移動するの必要あるなり。されば一定事物に永く嚴格に注意を集注せしむるが如きは、意識の常態に反する變態なりと云ふを得べし。されども之れ亦吾人に必須の態度たるなり。茲に於て或る論者は注意を目して有益なる病的状態なりと稱せり。斯の如きは固より過言なりと雖も、決して無根の説にはあらず、注意の極端に陥ち入るときは、實に一種の病的状態となるべし。痛く事物に執着するが如き、其の一例にあらずして何ぞや。

### 第一節 注意状態の特徴

注意状態の特徴は注意の法則とも稱すべきものにして、(一)注意は意識界の一部分を分明にし、當時の意識に分明なる部分と不分明なる部分との區別を生ず。而して意識の分明なると共に、感覺及び感覺上の識別力を鋭敏にし、感覺及觀念の再生を正確にし、且つ之れを容易ならしめ、又大に意識内容の分解作用を助く。注意が感情に集注したるときも亦之れを明瞭にす。或は注意が感情に伴ふ感覺又は觀念に集注するときには、感情を明瞭にすれども、感情其のものに集注したるときは、之れを微弱ならしむるか、或は全く之れを滅却すと云ふ説あれども、之れ謬見たるなり。(二)注意は意識の範圍を縮少せしむ、之れ前に説述したる所にして、其の一面には禁止作用行はる。意識の繼續範圍及び同時範圍は、注意状態に於ける意

識の範圍に外ならず。(三)注意を受くること強きに随ひ認識せらるゝことも亦早し。實驗の結果によれば例へば視覺上の刺戟と聽覺上の刺戟とを同時に與ふるも、注意が聽覺刺戟に集注するときは、視覺刺戟よりも早く認識せられ、視覺刺戟に集注するときは、聽覺刺戟よりも早く認識せらる。(四)注意状態は永續せしむるを得ず、時々移動するものとす。之れ主として感覺機官の移動に由るものにして、視覺上注意の移動するは眼球の移動によるなり。(五)注意を喚起せんが爲には或る時間を要す、之れ順應の必要より生ず、又注意は他に之れを妨げんとするものもあるも、暫時は現状を維持せんとす、之れ惰性の必然の結果なり。順應の必要は前の注意の惰性より生ずるものなるが故に、此の條下の法則は惰性の法則と見る

も可なり。深く思想に沈みある真中に來客あり、之れと接するに何となく乗り氣にならず、談和に不調和を生ずることあるは、全く注意の惰性によるものにして、順應の不完全なる所より生ずると云ふべし。實驗の結果によれば、意識の反應に最も適したる順應時間は、一秒半乃至三秒なり、即ち「用意」の合圖をなしてより刺戟を與ふる迄の時間は、此の範圍を越ゆべからず。設し之れより短きときは順應出來ざる爲め、刺戟を受くるときに意識に攪亂を生じ、設し之れより長きときは注意の動搖を來すが故に、觀察に不結果を生ずべし。

### 第二節 注意の條件

注意を喚起せしむるに必要な條件につきては、已に二三之れを述べたりしが、未だ擧げざるものを加へ之れを綜合して、

其の重なるものを云へば、(一)刺戟の強度。強き光、強き音、強き香ひ等總て強度の強き刺戟は注意を喚起す。是れに由りて觀れば注意状態の本質なる意識の分明は、畢竟強度の強きを云ふものにして、強度の強きものあるときは、之れと共に注意状態生ずるが如くなるも、決して然らず。常に注意を惹くべき強き刺戟と雖も、他に注意を集注したるときは、毫も知らざるもの如く全く注意を惹かざることあり、而も此の注意を惹きたるものゝ意識は、彼の強き刺戟程には強きものにあらず。例へば思想に耽りあるとき、若くは餘念なく文を草しあるときには、柱時計の時を報ずる音を聽かず、呼鈴の音に氣付かざることあり、而も思考作用又は作文の意識は、是等の音響よりも強しとは云ひ難し、(二)刺戟の性質。或る種類の刺戟は

強度必ずしも強きにあらずれども、特に注意を惹くべし。音響の色彩よりも注意を惹くは、強度の強き爲のみにはあらずるが如し。又或る痛覺は其の性質上一種堪へ難く、當時の全意識を集注せしむるが如き感あり、而も之れ強度の爲にあらず。其の他兒童の泣き聲は、假令微弱なるものと雖も、克く母親の注意を惹くにあらずや。(三)急激なる刺戟。同じ物にて、も徐々に示すときは注意を惹かず、然るに之れを急激に示すときは大に注意を惹くべし。氣候の急變は特に之れを感じずれども、寒暑の徐々の變化は假令氣溫の差違多き場合と雖も、特に之れを感じることなし。同じ刺戟を數々反復すること、も亦注意を喚起する一要件なり、例へば一二回呼びても應ぜざりしものが、數回の後には應ずるが如し。同一の廣告を數

回見て注意の促さるゝも亦此の二例なり。(四)刺戟の運動。樹間枝上にある鳥類は往々見落すことあれども、彼れ飛行し始むるときは、容易に人の認識する所となる。樹木の枝葉に止まる昆蟲につきても亦然り。其の他(五)新奇著明なること、(六)觀念聯合を惹起すること、(七)感覺機官の鋭敏なる部分に刺戟を向はしむること、(八)興味あること等は、何れも注意を喚起する條件なるが、之れ已に前に述べたり。以上八種の事項は、注意の條件なるが、注意を惹きたる物は記憶し易きが故に、是等は又記憶を助くる條件たるなり。

#### 催眠状態と注意状態との關係

實驗心理は健全なる個人の通常精神作用を實驗したる正式心理なり。唯、變體心理の研究に於ても實驗法を適用

すること尠からず、且つ正式心理の了解を助くる所あるを以て、以下少しく變體心理を説くべし。蓋し之れを此所に説くは、變體心理の主要部分なる催眠状態は注意状態と密接の關係を有すればなり。

催眠術なるものあり、例へば目を閉ぢて被験者に自己の呼吸を數へしめ、或は實驗者と被験者と互に手を握りて暫時目と目を見合せ、或は額を撫し、或は懷中時計の裏面の中心の如き單一なるものを凝視せしめ、以て所謂催眠状態となし、然る後ち暗示を與ふるなり。果して催眠状態に入れりや否やを檢せんが爲には、被験者の手を舉げ之れを種々の位置に置くべし、設し置かれたる儘の位置を維持せば、之れ催眠状態に入りたる證なり。茲に於て暗示をなし、淺草又

は上野を見物せしめ、或はマツチ箱を卓上に置き上がらずと暗示せば、如何に奮發するも舉ぐるを得ず。或は戸口迄は歩行するを得れども夫れ以外には一步も出づるを得ずと告ぐれば、戸口にて行き詰り、或は痛なし血出でずと云へば、手の皮を針にて貫くも痛を感ぜず、血出でず。或は繩又は紐を皮膚に付け、蛇なりと云へば、驚怖の情を起して脈搏呼吸にも變化を生じ、或は火傷を受けたり水腫出づと云へば、果して水腫生ずと云ふ。斯の如く一旦催眠状態に入るときは、暗示の効力殆ど無限なり、但し此の状態に入り難きものと易きものとの別あり、又入り易きものにては暗示の範圍及び効力の大なるものと小なるものとの別あり。催眠状態とは無我無想の精神状態にして、反對觀念、疑惑、批

評的態度等の自發的活動あるときは、此の狀態に入り難し。純粹受動態度を持ち、尙ほ斯術を信仰し術の成功を希望し豫期することは、此の狀態に入り易き條件なり。催眠狀態に於て暗示が事實となりて行はるゝは、不可思議の現象なるが如きも、決して然らず、日常行はるゝ精神作用に於ても之れと類似の現象あり。抑前に述べたる催眠狀態惹起の方法は、注意狀態惹起の方法に酷似せり。夫れ注意狀態は比較的單一にして、之れにはひき禁止作用行はる、然るに意識の活動には相當複雑なる内容を要し、變化流通を要するが故に、極端なる注意狀態は漸次意識の衰弱を來たし、終に睡眠を催さしむるに至る。例へば單調無味にして、且つ了解し難き講義を義務的に聽きあるときの如きは、明覺作用

行はれず、講師の言語が單に音響となりて聽者の耳朶を打つに過ぎず、眠らざらんと欲するも得ず、猶ほ幼兒が保姆に歌を唄ひつゝ、寢かさると一般なり。催眠法によりて就眠するも亦之れと異なることなし。暗示の實行せらるゝも亦奇異にあらず、恩人恩師又は偉人大家の如き自己の深く信じ、従つて最大の注意を拂ふ人物の言行思想は、早晩又自己の思想言行となるに非ずや。實に一種の催眠術は、特別の術を用ゐずして、日常行はるゝを見るなり。例へば店頭に立ち物品を買はんとするとき、初めには品物の良否、適不適、又は價格等につき種々の反對觀念起り、容易に決し得ざるべきも、終には店員の巧辯に誘惑され、彼れの要求に應じ、諾して去るが如き、又政談演説を聽くや、始めの程は大に

不賛成なるも辯士の能辯によりて不知不識遂に其の説に化せられ、何時か自己の意見となり、他日自己の行動となるが如き、皆其の原理に於ては、催眠術にかゝりたると差異あることなし。即ち反對觀念禁止せられ、意識の状態比較的單一となり、辯士又は店員の鼓吹する觀念のみ勢力を占め、遂に之れに従つて行動するものにして、注意作用の特質より生ずる自然の現象なり。催眠術を斯の如く廣義に見るときは、社會上の感化交際上の影響も亦一種の催眠術によれるものと云ふを得べし。而して斯る感化を盛ならしめんが爲には、威嚴と信用を要すべし、之れ信者に對する高僧勢力ある所以にして、宗教上の祈禱の功驗あるも此の理によるなり。猶ほ催眠術に於て術を信じ、斯術の成功を豫

期せしむる必要あると一般にして、信仰が精神状態を單一ならしめんとするの目的を助け、且つ暗示をして有力ならしむる所以のものも亦、畢竟注意を集注せしむるの便利を與ふるに由るに外なきなり。

通常の睡眠状態にありては、催眠状態に於けるが如き暗示の實行なく、奇現象を現せずと雖も、斯る奇現象は特別の被験者に限れるものにして、催眠状態に陥るもの何れも皆爲し得るにあらず。且つ通常の睡眠状態にても或る點迄は暗示の効力あり、又若干の對話をも爲し得るものあるなり。催眠状態に於ける奇現象は、全く不可解にはあらず。苟も觀念を有すれば、之れには必らず生理的方面あり、觀念は神經系統の基礎を有し、従つて亦營養作用及び分泌作用と密

接の關係を有し、又固より運動作用と連絡す、故に如何に奇怪なる暗示を受くるも、其の暗示の觀念が前記の生理的基礎を有する範圍内に於ては、實行せらるゝは不思議にあらずして、實行せられざるは却て不思議なり。但し反對觀念疑惑、批評的態度採ありて、觀念の活動を妨害するときは、此の限りにあらずして、實際催眠術の成功せざるときなり。然るに人或は問はん、斯る奇現象が無意識中に行はるゝは如何。然り被験者が催眠状態に於て遂行したる自己の云爲行動につきては、全く記憶せずとは云ふべからざるも、概して記憶を有せず。然れども睡眠中にありては意識を有せしならん、唯覺醒後之れを忘れたるなり。通常の場合に於ても之れに類する現象少からず、例へば夢に明瞭に意識

したる事項をも、覺醒後には全く記憶せざることあり、嘗に觀念の活動のみならず、睡眠中歩行をなし、其の他種々の動作を爲すものあり、彼等は覺醒後之れを記憶せず。斯の如きは前の意識状態と後の意識状態との間に連絡を欠く所より生ずるものにして、一種の人格變化によるなり。

催眠術は又之れを治療に應用して、頭痛、齒痛、リウマチ、肺病等に効能あり、又無痛にて分娩せしめ得と云ふ。總て機能上の疾病には効驗あれども、器質的欠損に基くもの即ち解剖學上の理由ある疾病には無能力なるが如きも、中樞作用の影響によりては、間接に諸種の機能を調節し之れを増進せしむるを得べきが故に、器質的欠損の疾病にも若干の効力なしとは云ひ難し。精神療法は特に催眠状態に入らざ



る通常の場合に於ても亦行ふを得べし。即ち所謂氣の持ち方にて寒からずと思へば寒からず、痛からずと思へば痛み和ぎ、健全なりと思へば元氣出て、逆境なりと悲觀すれば可なりの順境にも意氣沮喪し、肉食よりも菜食適せりと聽かば、洋食必ずしも満足を與へず、菜食するとき却て健康を感じ、其の他考へ方又は心の持ち方にて排泄作用などの生理作用にも影響する所あるが如し。所謂精神教育なるもの、根據も亦此所にありて存す。

催眠状態中に暗示したることは、管に之れを睡眠中に實行せしめ得るに止まらず、覺醒後に實行せしむるを得べし。例へば今より五時間を経て、某書籍を某室に持ち來れと命じ置きて覺醒せしむるときは、果して醒めて五時間の後に

至り、該書籍を所定の室に運び來るべし。而して之れを運ぶもの何の爲なるか一切其の理由を知らず、只一種自然の責任を感じ、運ばざるを得ざるに至ると云ふ。催眠術は之れを濫用するときには、種々の弊害を生ず。金員借用證を作らしめ、或は猥褻なる所業を敢てせし爲め、風紀問題に觸れ、刑事問題を起こし事あり。獨逸國にては催眠術に關する法律あり、嚴に制裁を加へんとす。醫學界にても種々の批難あり、醫し得べき疾病も催眠術を過度に信じて、治療を怠りし爲め、病勢を増進せしめ、或は死期を早めたる例證頗る多し。此の他催眠術の實行につきては、警戒すべき重要な事項少からず。

## 第十八章 感情の性質

夫れ感情の何物たるかを知らんとせば、先づ之れと知的作用との關係を明にするに若くはなし、而して此の關係は種々の點より考ふるを得べし。今之れを一般に云ふときは、第一、知的作用は分解總合の作用なり、然るに感情は常に當時の心持にして、認識識別の作用にあらず、一種の價値の經驗たるなり。

固より好惡、美醜、快不快等の如き感情上の區別ありと雖も、斯の如く區別するは之れ已に知的作用なり。感情は美たり醜たり快たり將た不快たる所以の直接の心持を指すものにして、區別し分解するの作用を云ふには、~~さ~~らざるなり。第二、感

情は主觀性にして、知的作用は客觀性なり。所詮知的作用は觀念又は觀念の結合を指すものにして、是等は孰れも自己の對象となる、之れ其の客觀性たる所以なり。然るに感情は自己の直接の状態にして、其の者のみにては對象と成り得ざるなり。

斯の如く感情は觀念よりも自己と密接の關係を有するが故に、自己の身體及び精神上の状態によりて變化を受くるの程度も亦、觀念が同原因によりて受くる影響よりも遙に大なり。例へば、汽笛の音響を聴くとせんか、一個の聽覺觀念としては、前に聴きたるときと同様に感ずることあるべし、然るに之れが與ふる感情に至りては、前後大に其の趣を異にし、或は悲哀の情を催さしむることあり、或は快潤の情を起さしむること

あるべし。設し又人々の位置境遇異なり身體及び精神上の  
状態異なる所より生ずる感情の差異に至りては、更に顯著な  
るものあるなり。

以上は唯普通の關係を示したるに過ぎず。此の他に感情を  
感覺より區別する標準少からず、されども感情は感覺と全然  
別種のものにあらず、却て相類する所あり。故に感情は感覺  
にあらずと雖も、感覺的なりと云ふを得べし。著者の此所に  
云ふ感情は單純なる快不快を指すなり。而して此の感情の  
性質及び之れと感覺との關係につきては、以下の補説に於て  
研究の結果を詳述すべし。

夫れ感情の心理を明にせんとせば、先づ單純感情の存在及  
び其の性質を研究せざる可からず。何となれば從來單純

感情の概念は甚だ不確實にして、全く異種類のものをも混  
入せらるゝの遺憾あればなり。抑感情が一種獨立の精神  
作用と認めらるゝに至りしは、チーチェン及びカント以後  
のことにして、氏等以前にありては一種の認識と見做され、  
知的作用の中に葬られたり。然るに彼等の認めたる感情  
なるものは、普通の茫漠たる意味の感情にして、現今吾人の  
所謂單純感情にあらず。ウント氏始めて單純感情を感覺  
と對立する要素的作用と見做せり。然るにウント自身の  
説より見るも單純感情の存在には尙ほ疑はしき所あり。  
氏の感情の起源の説明によれば、感情は刺戟を受け之れに  
對して内面より統覺的反應の生ずる所より起るものなる  
が故に、感覺の如き何等の媒介なく直接に刺戟に基きて生

ずるものとは異なり、統覺の内容の複雑なる作用の媒介によりて起るが故に、直接にはあらずして間接なるが如し、感情の主觀的にして變化多きは之れが爲めなりと云ふ。果して然らば氏は單純感情なる獨立の要素的作用存すと云ふと雖も、其の起源の説明によれば、感覺の如き單純にして直接のものにあらず、又固より感覺程には確實なる存在にあらざるが如し。加之、現今に於ても感覺的感情を感覺の屬性となし、或は體機感覺なりとし、或は一種の感覺なりと考ふる學者あり。是等は何れも單純感情の獨立存在を認めざるものと云ふべし、斯の如く單純獨立の要素的感情なるもの存在するや否やは、今尙ほ一大問題たるなり。茲に於て單純感情の性質を研究する必要あり、殊にヴントの三

對六種の單純感情を主張するに接し、益此の必要を認めたり、之れ著者が特に單純感情を研究したる所以にして、本節は即ち其の結果なり。凡そ感情を研究せんとするものにして、確實なる結果を得んとせば、實驗によらざる可からず、されど假令實驗にて研究せんと定むるも、尙ほ如何なる方法による可きか、如何なる方面につきて研究すべきかは、最初に來る問題なり。著者豫め感情の各方面につきて一般の研究を遂げ、快不快の存在につきては疑ふ可からざるものあるを信じ、而る後先づ之れが判斷の性質を研究せり。吾人が快不快を感ずるは感情なり、然れども之れを快又は不快と確むるときは、之れ已に判斷なり、殊に實驗に於ける觀察者の報告は、何れも判斷の形式を有す。されば快不快と

判斷する其の判斷の基礎を明にせざる可からず、快又は不快と判斷するに際し意識に行はるゝ所のものを發見せざる可からず、即ち感情判斷の性質を知るを要す。蓋し感覺判斷の性質は已に知れるるに反し、感情判斷の性質については、未だ殆ど知る所なければなり。茲に於て色彩と音響とを刺戟とし、一定の實驗的設備の下に觀察を試みたり。觀察者には快不快の判斷は、直接なるか間接なるか、設し間接ならば其の判斷の基礎又は理由及び其の動機等、總て判斷の媒介となりたるものを十分に觀察し、之れを敘述することを要求したり。今其の結果のみを擧ぐれば、感情判斷は直接にして自然で且つ容易なること是れなり。直接とは唯刺戟のみの基礎によりて認定するものにして、何等他

の媒介を要せず、第三者の理由及び動機の存せざるを云ふ。但し可なり多くの場合に於て種々の理由又は基礎を發見せりと稱す。音響の感情判斷の場合には、其の重なるものを擧ぐれば、(一)音の屬性を考ふること、殊に音が滑かなり平坦なり、杯と考ふること、(二)氣分に添ふや否や、當時の氣分を攪亂するや否やと云ふこと、(三)觀念聯合、(四)偏癖例へば低音を好み若くは高音を好む癖習、(五)呼吸又は脈搏の變化、(六)種々の體機感覺殊に耳の緊張感覺、鼻頭を刺戟する感覺、耳を閉ぢんとする傾向より生ずる感覺、頭、鼻、耳胸に於て振動する如き感覺、耳翼又は頭を衝き刺す如き感覺、頭をウナツカスより生ずる感覺是れなり。色彩の感情判斷に於ては、(一)觀念聯合、(二)飽和又は光度、(三)偏癖例へば克く飽和したる色

彩を好み又は薄黒き美術的色彩を好む癖習(四)種々の體機感覺(色彩の異なるに従ひ其の各色彩に特有の體機感覺)是れなり。而して色彩及び音響に通じて一般に快感を與ふる刺戟には引き付けられ不快を與ふる刺戟よりは引き離るゝ傾向あり。以上列擧せし事項が刺戟を快となし、又は不快と判断する理由又は動機となるものにして、間接判断の媒介要素なりと稱す。然るに是等の所謂間接判断なるものは、尙ほ之れを仔細に檢するとき、其の大部分は純然たる間接判断にはあらずして、實に直接判断なることを發見せり、即ち刺戟を受け之れが爲に直接に感情生ぜず何物の理由によりて感情の生ぜし場合は極めて稀なり、實際の順序は刺戟を受けて直接に感情生じ、而る後に其の理由

を求めたるなり、されば彼の理由の爲に感情生じたるにはあらず。是れに由りて觀れば上述の理由又は動機なるものは、感情を生ぜしむる生産者にあらずして、感情の發生を説明せんが爲の生産物なりと云ふべし。然らば假令一時とは云へ何故に觀察者が前の如き謬見に陥りしかと云ふに、元來著者の實驗に加はりし觀察者は、長年月の間感情の實驗に經驗を有するものなるが、其の中の一人は感情の直接判断を信ぜず、感情は論理作用より生ずるものにして、知的判断の結果と信じ、感情判断には第三者たる理由又は動機あり、之れによりて快又は不快と判断を下すと信ぜり。之れ彼れが個性の知的過重なるによれり。他の一人は感情は體機感覺に外ならずと信じ、之れを發見するに多大の

興味を有せり。之れ亦彼れの個性の致す所なり。斯の如く観察者の個性に基く彼等の見解が感情の直接判断に不利なりしのみならず、實驗者の余に於ても亦間接判断の見解に十分の價値を認め、其の理由又は動機を可成精細に見することを獎勵したり。之れ實驗の前期に於て、感情判断の間接なるを信ぜしむるに至りし所以なり。然るに後期に至り其の誤謬なることを發見し、彼等の分解反省の態度は、少くとも感情を薄弱ならしむるが故に、判断困難となり、第三者の理由によりて生じたるが如く思はしむることを認め、態度を一變する必要を生じたり。茲に於て全く受動的態度を取り、刺戟其のものによりて影響せらるゝ儘に任せ、可成觀念の活動を避けて判断せしめしに、前に困難に

して不自然なりし間接判断の大部分が、自然にして平易なる直接判断となりたり。之れ余輩關係者の意外とする所なれども、而も何れも満足を表せし結果なり。此所に一言附加すべきは、同じく受動的態度を取りしも、色彩刺戟の場合には注意を刺戟に注きたる方、感情を生ずるに適し、音の刺戟の場合には半ば眠りゐる如き状態が却て感情を意識するに適することは是れなり。斯の如きは聽覺機官の位置及び構造上音の刺戟の意識に訴ふること強きによるが如し。概して云へば虚心平氣の受働的態度が、單純なる快不快の經驗に最も適せり、而して注意を刺戟に注ぐと否とは刺戟の性質によりて異なるなり。尙ほ此の事實は日常普通の場合に於て見る所なり、即ち學理上の思考及び俗事上

の係累を離れて音楽を聴くとき、若くは紅葉狩りに一日の清遊を試むるとき、音又は色彩より生ずる快感の特に確實なるものあるにあらずや。

上來説述せし所は實驗の結果を得るに要せし種々の警戒、手讀、其の他總て實驗の條件を一切省略し、唯結果のみを擧げたるを以て、一見簡單なるが如きも、此の結果たるや重大なる意味を有すと信ず。以下少しく著者が前記の結論に到達せし迄に起りし思想變遷の經過を述ぶべし。著者先づ感情は主觀的なり總合的なり抔と考へたりしが、斯の如き一般の性質を認むるのみにては満足するを得ず、更に進みて其の性質を明にし、其の内容を捉へんとしたりしが、容易に快たり不快たる意識の内容を明にするを得ず。由

りて快又は不快なる特別の意識存在するにあらず、刺戟に引き付けられたるときは、其の刺戟を快と稱し、之れより引き離れんとするときは、之れを不快と稱するに過ぎざるかも知れず、果して然らば斯の如き感情判斷は知的判斷にして、且つ此の判斷の經過は無意に行はるゝが故に、感情は無意識的判斷に基くと考へたり。固より此の見解は快不快の意識の存在を認むるに困難を感ずる所より生ずるものにして、感情を論理作用の結果と見做すなり。

斯の如く考へ來れば之れにても亦満足するを得ず。茲に於て感情判斷の研究に移れり。感情判斷に對立する感覺判斷につきては、精神物理學の研究の結果として吾人心理學者の知る所少からず。感覺判斷の場合に於ては感覺の



現存不現存ゾビシ、ゾシシの範疇によりて、感覺の存在不存在を判斷し、又二つの感覺を比較する場合には、同様不同様の範疇によりて之れを判斷す。然るに是等の範疇は感覺其の物の性質に基くものにして、假令判斷の形式によりて認識せられ、範疇適用せらるゝも、之れが爲に感覺の存在又は其の性質に何等の變化をも來すことなし。然るに感情判斷にも亦斯くの如きものありや否や、疑ひなき能はず。感情判斷に於ては、觀念聯合種々の癖習、感覺の屬性を比較すること抔が、其の基礎となるやも知れず、而して是等の基礎は感覺判斷の範疇とは異なり、感情の存在又は其の性質を定むるものなりとせば、單純なる感情なるもの畢竟存在せざるに等し。果して然らば感情は終に近世心理學界に於ける意志作用

と同じ運命に遭遇し、感覺の一元論に歸着し、意志が一般感覺中に葬られたる如く、單純感情も亦其の存在を失ふやも知れずと思惟したり。然るに實驗の結果前述の結論に到達せり。元來感情の性質を明にするは容易の業にあらざるが故に、ヴントの如きも所説不確實にして、氏の前後の著書には矛盾する所あり。感情を感覺の調子と見做せし時期あり、或は之れを認識論的に解せし時あり、又或る時期には色彩よりは快不快の感情生ぜざるが如しと云ひ、終に現今の見解に移れり。且又刺戟と感情との關係につき、感情は刺戟の強度によるとし、或は其の質によるとし、現今にては復た其の強度によると主張す。斯の如く所説の動搖するは、畢竟氏の見解が確實なる實驗的基礎を欠くが爲なり、

但し獨斷固執せざるは敬すべし。感情の研究の困難なること斯の如し、然るに實驗の結果として前述の一定結論に達し得たるは、著者の聊か満足に感ずる所なり。

感情判斷が直接なる以上は、單純なる感情を経験せんが爲には、總て判斷をして間接ならしむる媒介要素は除去せざる可からず。已に精神物理學に於ても感覺の起り又は其の強度の變化を研究するに際しては、觀念聯合、癖習杯は純粹感覺を攪亂するものとして除去することに力む。されば媒介要素のみを認めて單純感情を経験せざるは、恰も城壁に達して未だ天主臺に昇らざるの遺憾あるが如し。

色彩及び音響の外に嗅覺、觸覺及び溫度の感覺的感情につきて研究したれども、是等の感覺の感情判斷の直接なる

こと疑ひを容るゝ餘地なし。故に研究の方面を一變し、感情の反應時間の研究に移れり。前記の結果は感情の敘述的實驗心理なるが、之れのみにては顔を作りて眼を入れざるの觀あり。實驗心理としては數量的研究を希望せざるを得ず、之れ反應實驗を試みし所以なり。此の實驗に於ては快不快の發作に要する時間を研究し、之れを感覺の認識に要する時間と比較したり。今其の實驗の結果を云へば(一)快不快の發作に要する時間は感覺の認識に要する時間よりも長し、(二)然れども其の差異たるや全く種類を異にする程のものにあらずして、同一の階級に屬す、(三)反應時間の實驗を感情の方面に試むるに、其の效力及び範圍は感覺の方面に於けると大差なし。是等は結果の主要なるものに

して、此の他に尙ほ發見したる事實少からずと雖も、複雑に過ぐるを以て省略すべし。感情の反應時間は刺戟を受くる感覺機官の異なるに従ひ、同からずと雖も、此所に中間に位する反應時間を擧ぐれば

反應時間	觸溫冷音色畫
73.5	
73.0	
84.0	
67.9	
69.7	
42.5	

右表中の時間の單位は百分の一秒なるが故に、何れの反應時間も一秒以内なるを知るべし。觸覺の感情は唯刺戟物に觸れたるのみにては生ぜず、故に刺戟物の堅きか柔きか將た粗きか滑らかなるか杯を経験せしめ、之より生ずる感

情の反應時間を研究したるなり。溫は攝氏約五十度にして、冷は氷水の程度なり。繪畫は暗室内にて二燭光を照らして實驗したるものにして、感情を生ずるに頗る適したる状態にありたり。其の他實驗の條件は一切省畧し、唯極めて一般の結果のみを擧げたり。

更に前述の三種の結論につきて説明せんに、其の第一即ち快不快の發生に要する時間の感覺認識の時間よりも長しと云ふ結論は、二三有力なる心理學者の所見に反す、ゾーンの如きも其の一人にして、氏の說によれば感情は前觸れとして感覺の前に現るゝ場合あり。氏が斯の如き説をなすは、感情の性質の見解が異なるによるものにして、明に實驗の結果に反す。ミュンスターベルヒは感情は感覺よ

りも後に生ずと思惟すれども、其の理由とする所異なれり。氏の説によれば感情の發作には三段階の作用を要す、即ち第一感覺的結合、第二感覺及び觀念の統覺的結合、第三此の統覺的結合と體機感覺との融合是れなり。而して感情は是等の三段階を経て始めて現るゝものなるが故に、時間を要すること感覺認識の場合よりも多し。然るに著者の所見によれば、感情發作に時間を要すること多きは、感情意識の感覺に比して不分明なることにあり。前記の繪畫の實驗に於ては統覺的結合及び體機感覺生ぜし場合少からずと雖も、他の刺戟の感情に比し反應時間却て短少なり、之れ感情が比較的分明なればなり。又之れに反し統覺的結合及び體機感覺生ぜざるにも拘らず、反應時間特に長き場合

頗る多し。之れ感情意識の不分明なるによるなり。是れに由りて觀れば感情の反應時間の長きは、其の意識の不分明なるによること疑ふ可からず、尙ほ之れ被験者の内面的觀察の證明する所なり。第三の結果は反應時間の實驗が感覺に於けるが如く感情の研究に實行され得ることを證するものにして、之れ即ち感情の發作、其の経過及び其の終りが感覺の如くに確實なることを證するものなり。蓋し然らざれば感覺に於けるが如く反應實驗を實行すること能はざるべし。されば此の證明は又感情の性質を夫れ丈け明にしたるものなり。反應時間の實驗が心理學上の實驗となりしは、今より約一百年前ベッセル氏より始まり、其の後半世紀を経て精神時間學の中興となり、爾來益々内面

的發達を遂げて愈心理學的となり、現今にては其の精微の域に達せり。然るに斯る長年月の経過中、反應時間の實驗は常に感覺の認識作用識別作用及び其の他の知的作用に限られ、感情の反應實驗なるものなし、之れ感情意識は感覺意識とは全然其の性質を異にし、暗に反應實驗抔試むるを得ずと信ぜしによるべし。

今感覺と感情との關係につき、以上實驗の結果を總括して云へば、快不快は其の發作に要する時間の感覺認識の時間よりも長き點に於て感覺とは異なれり。然れども感情判斷が直接にして、且つ快不快の反應時間が感覺のそれと同種類に屬するの點に於ては、感情は感覺に類似す。

此の結論を本として重なる心理學者の見解を評すれば、

先づチチエナー教授は時としては快不快と感覺とは相類すと説くも、又時として二者相關せざるが如き口吻あり。快不快は絶對的に分明を缺くと考ふる如く、且つ快不快の同時存在を否定するが如し。然るに快不快は頗る感覺に類するものにして、左程不分明にあらず、且つ快感は不快感と同時に存在するを得べし、ツント教授は快不快は獨立の要素的作用にして、感覺とは全く異なれるものと考ふ。而して此の見解はやがて感情の數の意見に差違を生じ、快不快の外に尙ほ多くの單純感情を認むるに至れり、之れ首肯し難き所なり。シュツンブ教授は感情は感覺に伴ふて中樞に生ずる一種の感覺なりと考ふ。然るに快不快は感覺に類すれども、全然感覺なりとは云ふを得ず。之れ少

くとも反應時間の研究によりて明なり。其の他感情は以下  
の諸點に於て感覺と區別するを得べし、即ち第一感情は  
主觀的にして感覺は客觀的なり、第二感覺は空間を占むれ  
ども感情を之れを占有せず、第三快不快の兩極端は反對な  
れども、感覺の兩極端は最大差異なり、第四再生感覺は現實  
の感覺より微弱なれども、感覺的感情の内面に生じたるも  
のは、現實の感覺的感情と其の強度に於て略ぼ同一なり、第  
五感情は習慣によりて微弱となれども、感覺は之れにより  
て變化することなし。例へば赤色は幾回之れを見て習慣  
となるときも、其の性質變化することなし、然るに之れより  
生ずる感情は習慣となるときは終には消失すべし、第六感  
覺は之れに注意を集めて其の性質を究めんとすれば分明

となる、然るに感情は其の基礎たる感覺に注意するとき  
は、分明の度を加ふれども、感情其のものゝ性質を究めんとし  
て之れに注意するときは、不分明となる。是等六種の事項  
は諸家の提出したるものなるが、感覺を感情より區別する  
眞の標準たり得べきや否や、之れには多少の異論あるべき  
も、一般に云ふときは是等の諸項は感情と感覺との區別を  
指摘して餘りありと云ふべし。然るにシュツンブフ氏の  
云ふが如んば、是等の區別を無視せざる可からず。ミュン  
ステルベルヒ教授は感情判断を間接なりと考へ、其の發作  
には複雑なる経過を要すとし、結局は感情を體機感覺の一  
部となす、之れに對する評論は已に述べたる所にて明なる  
べし。ジエムス教授は單純なる感覺的感情の存在を許せ

ども、此の感情たるや極めて微弱なるものにして、且つ唯稀に存するが故に、存在せざるも同様なりとし、通常所謂感情は體機感覺に外ならずと信ぜり。然るに快不快の單純感情は左程微弱なるものにあらず、又稀に存するものにもあらずして、却て普通に經驗するを得べきものなり。且つ又感情は體機感覺に外ならずとせば、快たり不快たる意識は如何にして體機感覺より生ずるか、之れ難問たるを免れず。感覺の意識と快不快の意識とは全然別種の意識なるが故に、二にして一にあらず、例へば草木の綠色の意識は綠色の綠色たる意識にして、之れを眺めたるときに生ずる快感とは全く別種なり。設し感覺の意識と快不快の意識とを一にして二ならずとせば、感覺の存在を否定するか、然らざれば

ば快不快の感情の存在を否定せざる可からず。感情は其の内面的なると且つ其の比較的、不分明なるとの點に於て、體機感覺に類する所あるを以て、往々二者を混同するの誤謬に陥り易し、之れ獨りジエムス教授のみにあらざるなり。以上は單純感情の性質及び單純感情と感覺との關係につきて述べたりしが、之れにつきての見解の差違は、やがて單純感情の數及び其の起源の見解に大なる差違を生ず。次章に於て之れを論ずべし。

### 第十九章 感情の數

感情に單純感情と複合感情との別あり。單純感情とは單純なる快不快を云ひ、複合感情とは單純感情と一般感覺、觀念

又は其の他の知的作用との合成作用にして、純然たる感情の複合體にあらず、唯感情及び之れに類似の主觀的要素重きを爲すが故に、之れを感情と云ふ。感情をして複雑ならしむるは、主として之れに伴ふ知的内容の複雑の度合ひより生ず。されど内容の複雑なるもの必ずしも複合感情を生ぜず。例へば會て見馴れたる物に再會するとき、一種の快感を生ずることあり、之れを昵近の感情と云ふ、而して此の感情は單純なる快感なれども、其の内容たる知的作用に至りては、決して單純なるものにあらず。又感覺より生ずる感覺的感情は多くは單純なる快不快なれども、必ずしも然らず、一般感覺の加はる場合少からざるなり。

感情に種々の區別を生じ種類の別ちを生ずるは、主として

之れに伴ふ知的方面の範圍の區別より生ず。抑吾人の認識又は思考作用は種々の範圍に別るゝものにして、(一)生存上の利害安危に關するあり、之れより情緒生じ、(二)或は理想的實在の觀念たるあり、之れより宗教的感情生じ、(三)或は行爲を規定する理想となるあり、之れに聯關して本務及び良心の感情生じ、(四)或は知的内容が論議作用に屬せずして、感想或は靜想の對象たることあり、以て美的感情生ず、(五)或は又實踐實用に關せず尙ほ又靜想の對象たるに止まらざる純然たる認識若くは思考たることあり、之れに伴ふて知的感情生ず。斯の如く感情の區別は範圍の區別に基くが故に、此の區別の立て方を變ずるときは、感情の區別にも變化を生ず。身體の愉快不愉快の如きは前記の何れの範圍にも屬せざるが如し。嚴冬の



候寒冷に堪へざるの際、暖室に入り若くは暖爐を擁するの愉快、酷暑の候終日蒸暑に煩悶したる後、夕方湖邊の冷しき軟風に面を拂はるゝの愉快、是等は單に温又は冷の皮膚の感覺より生ずる感情にあらずして、身體全體の状態によれる感情なり。固より喜悅の情緒と云はゞ當らず。

上述せる如く感情の區別は、主として内容の範圍の異なる所より生ずるものにして、感情其のものに性質上特別の差異あるより生ずるにあらず、即ち便利上の分類にして、眞の種類上の差異にはあらざるなり。然るに斯の如き分類より生じたる種類の數を感情の根本の種類の数と見ば、之れ誤謬なり。其の他總て、不分明なる精神作用を感情と稱する傾向あり、之れ亦感情の數に關する誤謬の一大原因なり。例へば疑惑の

感情、信念の感情、實在の感情、關係意識の感情、杯を各特殊の感情なりと考ふるものあり、是等は快若くは不快なる以上は感情なれども、然らざれば茫漠たる知的作用の意識に外ならず。意識の不分明なる點に於ては單純感情に類すれども、唯知的意識としては、大に之れと異なる所あり。即ち快不快の感情には刺戟に對して去就の傾向生じ、或は當該現狀を維持し、若くは之れを變更せんとする傾向生ずべきも、前記の不分明知的意識には斯る特徴なし。但し疑惑の場合に此の状態より逸れんとする傾向あるは、不快感若くは痛覺の之れに伴ふものあればなり。

感情の根本の種類の数、快不快の一方面に過ぎず。然らば情緒は如何、例へば恐怖の情緒の如きは一種特別の意識に

して、知的意識にあらず、又活動の意識にもあらずして、一種の根本的感情なるが如きも、仔細に檢するときには、彼の意識は恐怖の刺戟に對する一定の態度に伴ふ一般感覺と單純なる不快感とに外ならず。

假令感情は快不快の一方面に止まるとするも、其の中には多種多様の快不快あり、感覺の異なるに従ひ感情も亦異なるが如く、畢竟快不快は總稱なるが如きも、快不快をして多種多様なるが如く思はしむるは、一には感覺上の差異を感情の差異なるが如く輕卒に想像すること、又一には感覺の異なる所より異なる一般感覺生ずるが故に、此の差異を感情の差異と誤解することより生ずるなり。純然たる快不快は一樣系統にして、唯強度の差異あるに過ぎず。

ワントは快不快の方面の外に興奮的若くは沈靜的感情の方面と、緊張感情若くは弛緩の感情との二方面を認め、總て三方面三對六種類の單純感情ありと考ふ。其の中二方面四種類の感情は、快にあらず不快にもあらずる中性感情にして、之れを無記感情と云ふを得べし。快不快の感情の標本とも見做すべきものは、一般感覺及び嗅覺味覺に伴ふ感情なり。例へば痛覺の如きは他の感情を生ぜずして全く不快感のみを生ずるが如し。興奮的及び沈靜的感情の方面とも云ふべきものは、赤色より生ずる興奮的感情及び青色より生ずる沈靜的感情是れなり。緊張及び弛緩の感情は或る刺戟を豫期し、而して後ち豫期したる物の直接に現れたる時に生ずる感情なり、例へば某の物が程無く現るゝならんと待ち望み居る時

に生ずるものは緊張の感情にして、其の物が現れたる時に生ずるものは弛緩の感情なり。されば緊張及び弛緩の感情の標本とも云ふべきものは、豫期の感情及び豫期満足の感情なり。然るに是等の感情は興奮若くは沈靜の感情たることあり、或は事情によりては快若くは不快の感情たることあるなり。之れ豫期の目的たる刺戟物の性質如何に因るものとす。然りと雖も他の感情全く缺乏して緊張若くは弛緩の感情のみ現るゝことあり、之れ此の感情を獨立の一種と見做し得る所以なり。氏は三對感情説の根據として上述の如き自己觀察にて得たる證明を擧げ、又情緒の種類のは是等三對感情に符合するを指摘し、且又表情實驗法にて得たる結果を提供せり。然るに是等の證明には少からざる難點あり。到底三對説を

確むるに足らず。感情の根本の種類は快不快の一方面に限れるものにして、夫れ以外には存することなし。緊張の感情は實は注意の態度に伴ふ一般感覺に外ならず、殊に感覺機官の順應及び呼吸の制御に伴ふ筋覺が其の主なるものなり。弛緩の感情は注意の撤去に伴ふ一般感覺に過ぎず。興奮沈靜の感情も亦實は一般感覺殊に體機感覺なるが如し。緊張弛緩の感情にあらざるは明瞭なりと雖も、興奮沈靜に至りては若干疑ひなきにあらず。夜中燈火を見れば興奮するが如く、暗室に入れば沈靜を感ず。然れども是等の場合に於ける興奮沈靜は、單純感情にあらずして情緒なるか、將た氣分若くは其の他の一般感覺にして、快若くは不快たるなり。ツント氏は何故に前記の如き多種多様の感情を認むるに至りしか

と云ふに、开は氏の單純感情の性質に關する見解より生じ、此の見解の差異が感情ならざるものをも感情と見做すに至らしめたるなり。グレーヴツチ、フナグト、ロイス杯の諸氏も同様の誤解に陥ち入れり。グ氏は三對感情の外に努力及び抵抗感情の一方面を加へて四對八種となし、フ氏は能動所動の感情を添へて同じく四對となし、ロ氏は快不快と平安不安との二對四種類に過ぎずと考ふ。又以て三對感情説の確定せざるを見るに足るべし。

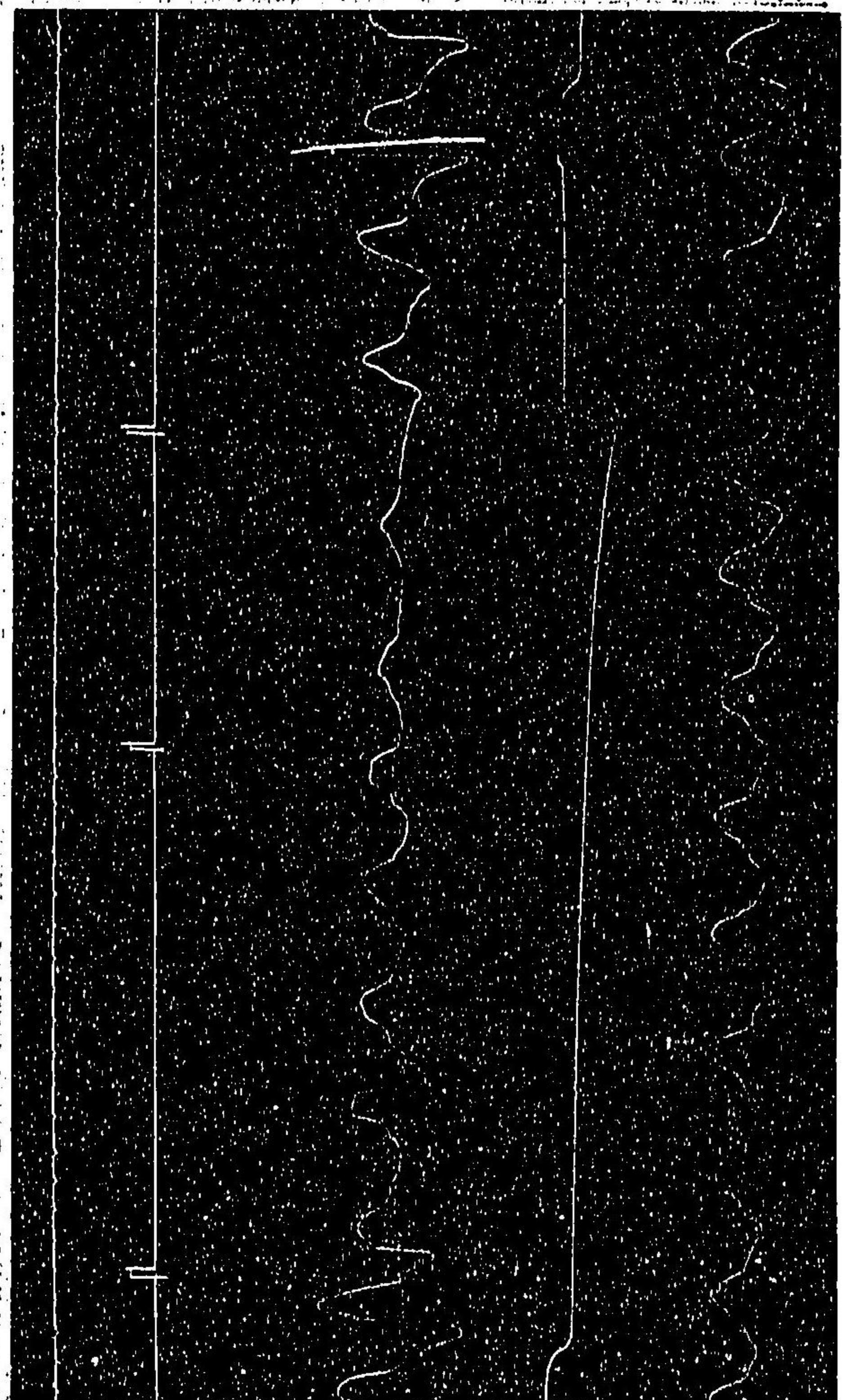
感情には之れに伴ふ表出あり、其中呼吸、脉搏、及び血管の容積の變化は、最も確實に實驗することを得べし。唯斯かる生理現象は注意状態の影響を蒙ること多大なるが故に、實驗の設備と自己觀察とによりて、其の影響の程度を確め、純然たる

感情の表出を發見せざる可からず。左に示せる圖は呼吸記載器械にて寫出せる呼吸波動にして、感情の刺戟としてはピヤノの音を用ゐたり。

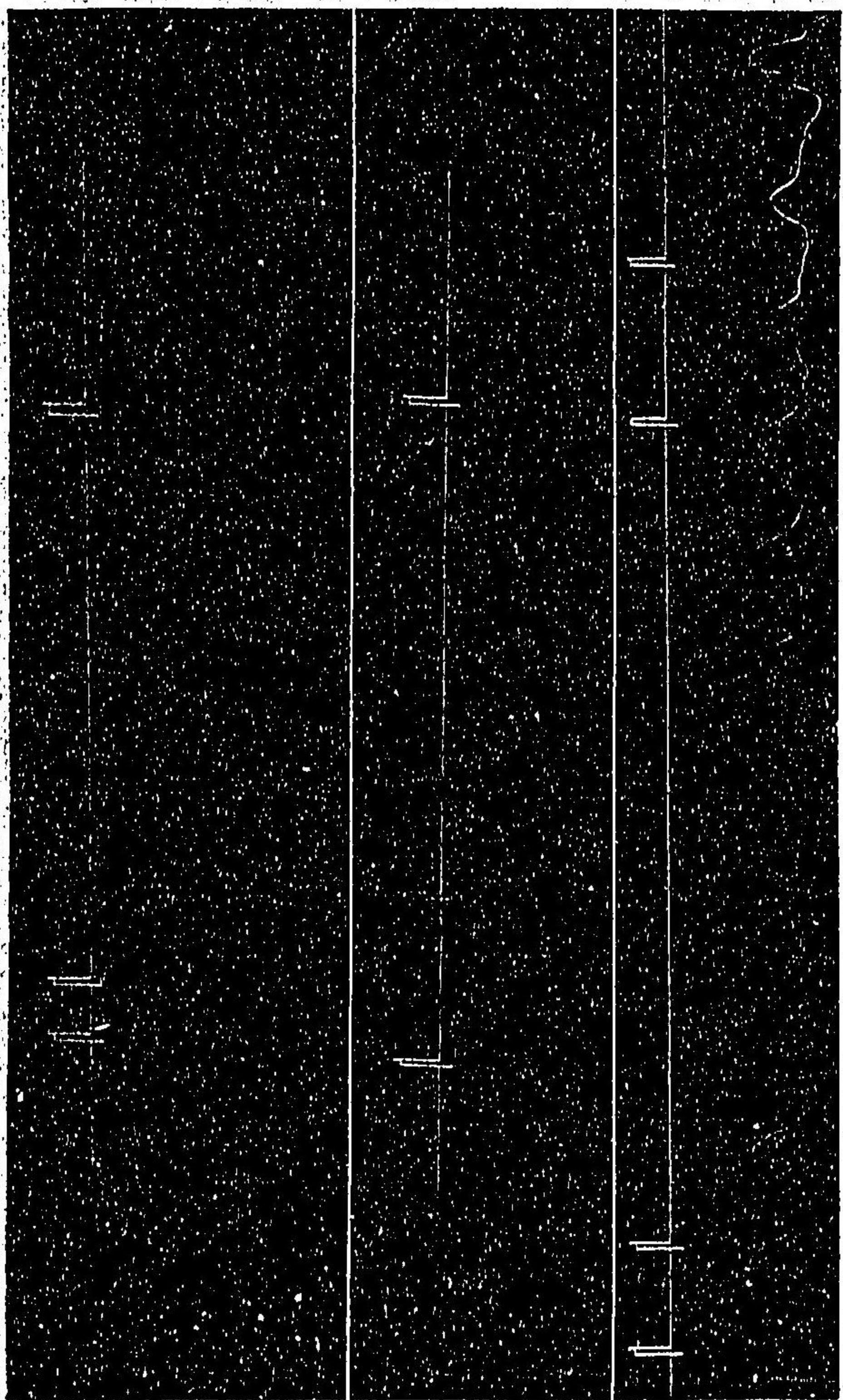
左の三圖の呼吸波動は著者の實驗に加はりし觀察者の一人なるウエスト嬢の表情波動なり。第七圖の上より第一の波動は腹部の呼吸にして、第二の線の上に折れんとする所にて刺戟を與へ、第三の波動は胸部の呼吸なり。第四の線は時間を表すものにして、小さき一突起より次の突起迄は一秒間なり。第五の線は反應の標識を示すものにして、下方へ向へる十個の突起は即ち十回の反應を示すなり。左方の最初のものは不快感の標識にして、第二の標識は一層の不快を感じたる反應なり。第三より第九迄は何れも快感の標識にして、



第七圖



第八圖



第九圖

第十は刺戟の音の消失したるとききの標識なり。快不快の呼吸刺戟前の呼吸及び刺戟消失後の呼吸に於ける變化を比較し、其の間の異同を観察すべし。第八圖の上より第一の波動は通常状態に於ける普通呼吸にして、音の刺戟なき場合なり。第三の波動は胸部の呼吸なり（腹部の呼吸は微弱なるが故に略せり）。波動は左方にある縦線より始まり、此の縦線より左方の部分は前の實驗に屬するものにして、此所には必要なし。第一の反應は不快感發生の標識にして、此の不快感が第二の標識迄續き、之れより快感に變じて第三反應迄續けり、此の快感の終ると共に音覺も亦消失せり。第九圖の波動は何れも胸部の呼吸なり、上圖の第一反應は不快感發生の標識にして、此の不快感が第二標識迄續けり、但し觀察記録によれば

此の後半は快感と不快感との混合感情なり。第二より快感となり、第三反應は此の快感の消失を示し、第四標識は音の消失を示す。下圖の第一反應は不快感發生の標識にして、第二標識は此の不快感の終りを示し、第三標識は音の消失を示す。中圖の第一反應は快感と不快感との混合感情の發生を示し、第二標識は此の混合感情の終りを示し、第三反應は音の終結を示す。されば第二反應と第三反應との間は感情の伴はざる純然音覺の呼吸波動なり。今第一第二及び第三の圖に表はれたる波動の性質を考ふるに、不快の波動は淺くして長く、且つ不規則なり。快感の波動は不快のそれよりも深くして短く、而も整然たる所あり、概して通常の呼吸に近し。混合感情の波動は其の形狀に於て快不快のその中間にあるを見

るべし。刺戟前の波動は刺戟消失後の波動よりも淺くして長し、而も不規則なるは兩者共に一なり。

## 知的感情

知的感情とは純然たる認識又は思考等の如き知的作用に伴ふ感情を云ふ。然らば感情は單獨に存するものにあらずして、常に知的作用に伴ふものなるが故に、何れの感情も知的感情にあらずやと難ずるものあるべし。之れ當然生ずべき疑問なりと雖も、前に述べたる如く知的作用は種々の範圍に別るが故に、之れによりて區別を爲すを得べし。夫れ知的感情は先づ一般知的感情と特殊知的感情との二種に分る。一般知的感情とは知的作用一般に伴ふものにして、興味の感情是れなり。

興味は前に述べたる如く、觀念の活動的聯合より生ずる快感なり。然れども之れを廣義に解するときは、總て感覺及び觀念の結合する所より生ずる感情なりと云ふを得べきものにして、必ずしも活動的聯合を要せざるなり。之れ興味的一般知的感情たる所以なり。蓋し一切の知的作用は、感覺及び觀念の結合に外ならず、而して興味は總て是等の結合の行はるゝ所に生ずればなり。されば苟も知的作用の行はるゝ所には、興味は感情生ずべし。彼のヘルバルトが經驗的興味、窮理的興味、審判的興味、同情的興味、社會的興味、宗教的興味等六種の興味を擧げたるは、興味を其の廣き意義に解したるものにして、教育に於ては便なる所あるなり。

次に特殊知的感情とは(一)事物の認識に伴ふ感情(二)已に認識したるものを後に至り更に再認するときに生ずる感情(三)想像及び判断に伴ふ感情(四)思想の經過状態より生ずる感情等を云ふ。判断の感情は合意又は不合意の感情にして、内部的な一般感覺の多く加はりたる快若くは不快の感情なり。思想の經過状態より生ずる感情とは、例へば思想の活動宜きを得て思考纏り易きときの快感、思想凝滞して不活潑なるときの不快感を云ふ。

#### 善意識の感情

善意識の感情とは良心の感情にして、本務の感情及び行爲遂行後の審判的感情是れなり。本務を遂げざる時の不快感、行爲遂行後の満足の快感、又は叱責の不快感等を云ふ。



實利主義は行爲の結果の利害を標準となし、快樂の分量を本となすが故に、全く思慮分別に據るものにして、前述べたるが如き良心の感情を認めざるもの如くなれども、必ずしも然らず。已に彼のミルの如き實利論者と雖も、一種嚴肅なる正義の感情を認めり。只其の起源の説明に至りては直覺論者と異なるなり。ミルの説によれば正義の感情は收賄、詐欺、強迫等の如き有害の結果を來すべき事件に對して生ずるものにして、總て斯の如き罪惡は一度暴露するときは、再び回復することを得ざる惡運を來すと考へしむる所より生ずるなり。

社會心理の見解より云ふときは良心の感情は、年少の時より受けたる修身上の訓戒と實行又は其の觀念との一致し

若くは一致せざる所より生ずる快又は不快の感情なり。而して此の感情は生理的心理學上より云ふときは、主として血液循環に變動を來したる爲め、心臟の邊に生じたる血管及び呼吸筋の或る作用の感覺に外ならず。

## 第二十章 情緒

### 第一節 情緒と感覺的感情との關係

概して生存上の利害安危に關する場合あるときに生ずる主觀的興奮之れを情緒と云ふ。喜怒哀樂、希望、恐懼等の如き感情是れなり。而して情緒の感覺的感情と異なる所は、其の知的内容の複雑なること、内部的一般感覺の顯著なることとにあり。感覺的感情の内容は感覺なるが故に單一なれど

も、情緒にありては種々の觀念を含むが故に、其の内容遙に複雑なり。

### 第二節 情緒の類別

情緒は之れを大別して三種となすを得べし。即ち第一種は感情の主觀的性質に基きて區別したるものにして、喜悅及び憤怒等の情緒を含み、第二種は或る外物に對して生ずるもの即ち嫌惡、憤怒等の如き客觀的情緒を云ふ。第三種は主として將來に豫期すべき外部的事變に關するもの例へば希望、恐懼等の如き情緒是れなり。されば此の種に屬するものも亦客觀的情緒たるなり。

ランゲの説によれば情緒は、隨意筋並びに血管及び臟腑の筋の興奮の増加又は其の減少に基くなり。然るにウントは

此の説に反對して曰く、例へば憤怒の情及び喜悅の情は、孰れも隨意筋の興奮を増加し、血管を膨脹せしむるが故に、ランゲの説果して眞なりとせば、是等の情緒は同一種類の性質を有せざる可からず、ランゲは是等二種の情緒を區別せんが爲め、怒れるもの、運動には調和なしと云ふの差異を擧げたれども、之れには往々除外例あり、且つ此の區別は重大なるものにあらず。されば憤怒の情と喜悅の情とを區別すべき理由あることなし。然るに吾人が現に感ずる所によれば、是等二の情緒は全く相異なるが故に、ランゲ一派の論者の如く情緒の基礎を、反射作用によりて腦髓以外の部分に起れる生理作用より生ずる一般感覺に求めんとするが如きは、誤謬の甚しきものなりと論結せり。

茲に於てミュンステルベルヒ曰く、大體に於てはランゲの説可なりと雖も、此の他に尙ほ情緒の區別を生ずべき一大事實あるを看過せり、此の點に於てはウントも亦ランゲと異なることなしとし、長年月の間親しく實驗せし結果に基き、情緒には外延的なるものと、内縮的なるものと、の別あることを示せり。即ち曰く例へば憤怒の情及び喜悅の情は孰れも、筋肉興奮の増加に基く情緒なりと雖も、其の興奮たるや、反對の筋肉に生ずるなり、其の證として、怒れる人は拳を固め、腕を扼し、眉間を皺め、齒を喰ひ縛り、呼吸を強むる等總て内縮的運動を表すべく、之に反し喜べる人は、手にせるものを得意に振り廻し、呼吸を深くし、眼を見張り、手足を張り出す等總て外延的運動を表すべし。斯の如く正反對の態度を現すは、畢竟反對筋

肉の收縮によるなり。之れ憤怒の情と喜悅の情との差異を生ずる所以なりとす。ランゲ氏等の看過せしは、實に此の點にあるなり。但し大體に於ては憤怒喜悅に限らず總て情緒は、反射作用によりて腦髓以外の部分に起れる生理作用より生ずる一般感覺に基くと云ふの説、即ち彼の外周説は當を得たるものと云ひ、情緒の内容の主要なる部分は、隨意筋並びに臟腑及び血管の筋に於ける興奮の増加又は其の減少の作用(即ち反射的に腦髓以外の部分に起れる生理作用)より生ずる一般感覺に外ならずと論ぜり。

ミュンステルベルヒ氏更に進みて曰く、喜悅の情と憤怒の情との正反對なるは、外延的運動の行はるゝと内縮的運動の行はるゝとの別より生ずることは、前已に述べたる所なるが、

其の正反對たるや、快と不快との反對感情なるが故に、之れを推して考ふるに情緒の快不快の區別は、外延的運動と内縮的運動との反對運動より生ず。嘗に之れのみならず、抑感情に快不快の別あるも亦、全く此の原因より生ずと論ぜり。之れ單純なる快不快を一般感覺にて説明せんとする説なるが、其の當不當は已に之れを述べたり。

然れども愉快なるときに外延的態度を表し、不愉快なるときに内縮的態度を表すは、吾人の等く認むる所なり。然らば何故に斯の如くなるか。或は生物界に於ける自然淘汰より生じたる必然の結果なりと看做すも可ならん。例へば恐懼の如きは、内面に於ては不快感にして、外面に於ては内縮的態度を表す情緒なるが、恐懼の情を起すべき刺戟は、概して不利

益となり易きものなるが故に、内縮的運動をなして之れより遠ざかるを得べき生物は生存し、外延的運動をなして之れに近くの習慣ある生物は滅亡すべし。故に今日尚ほ生存する生物の種類は、恐懼の情を起すが如き刺戟に遭遇するとき、内縮的運動を生ずべき生物たらざる可からず。現に吾人人類を始め細小なる昆蟲に至るまで、危害を受くべき恐れある刺戟を知覺し、恐懼を催すときは、之れと共に内縮的運動を生ず。試みに物の尖を以て蜈蚣に觸れよ、直に内縮するを見るべし。斯の如くにして生體の態度より生ずる一般感覺が情緒の重なる内容を爲すなり。然れども態度より生ずる一般感覺は、單純なる快不快の終局の起源を説明するものにはあらざるなり。

## 第三節 情緒の表出

精神作用は何れも外部に表出するものにして、假令感覺の如き單一なるものにて、其の種類の異なるに従ひ表出の狀態異なるなり。只複雑強烈なる精神作用に於ては表出明なるを以て、何人も認め得べしと雖も、單一なる精神作用に至りては、容易に之れを認むるを得ず。されども適當なる装置を以て實驗するときは、微細なる表出をも知ることを得べし。例へば寫出法なるものあり、精神作用に伴ふ生理的物質現象を寫し出す法にして、主として脈搏及び呼吸の變化を元とし、之れを波線に表すなり。此の方法にて研究したる結果によりて見れば、色彩の如き單一なる精神作用と雖も、其の種類の異なるに従ひ各表出を異にす、例へば赤色を感覺したるとき

は、綠色を感覺したるときとは波線の形狀異なるを見るなり。感覺の如き單一なる精神作用と雖も、其の種類の異なるに従ひ表出を異にすること夫れ斯の如し、況んや情緒の如き複雑なる作用に於てをや、其の表出の明瞭確實なる固より其の所なりとす。故に特別の器械を用ゐざるも尙ほ能く人の熟知する所となり居るなり。即ち怒るときは怒りの表出あり、喜ぶときには又之れに對する表出あり、泣くこと、笑ふことの如きは是れなり之れを情緒の顔面表出と云ふ。但し斯の如きは情緒表出の一種に過ぎざるなり。情緒の表出は之れを大別して三となすを得べし。即ち第一種は脈搏及び呼吸に於ける變化にして、第二種は顔面表出なり、而して第三種は身體全體の態度及び手足の動作に表るゝものなりとす。今是等三

種の表出の中第二種の顔面表出につきて考ふるに、顔面に表るゝ表出は物を味ふときの顔附と類似す、即ち苦痛あるときには酸きものを食したるときか、或は苦きものを食したるとききの顔附を表し、愉快なるときは、甘きものを食したるとききの顔附を表すべし。然り而して何故に斯の如く情緒の表出は味覺の表出と同じかと云ふに、之れ味覺に伴ふべき感情の性質と情緒の主觀的性質とが相等きに由るなり。而して此の事實は尙ほ言語の上よりも證するを得べし、例へば辛酸を嘗むと云ふが如き、或は愉快なることを言ひ表す爲には、蜜又は之れに類する甘きものを表す語を以てするが如き是れなり。

#### 第四節 表出の進化

凡そ精神發達幼稚にして、且つ神經系統未だ十分に分化せ

ざる時代にありては、表出の有様頗る亂雜にして、身體全體に亘るを見るべし。小兒につきて觀察するに、例へば苦痛あるときは、嘗に顔面の表出に止まらず、手足の運動に表れ、身體全體の動搖を來すべし。喜ぶときにも亦之れと等しく、一局部に限られずして、其の影響身體全體に及ぶなり。然るに身體の諸機關漸次發達し、且つ之れと共に經驗を加へ多少の思慮生ずるに至るときは、表出の状態大に變化し、不必要の表出減少し、無用の作用の爲にエネルギーを浪費せざるに至る。

茲に於て情緒の表出に制限行はれ、且つ規律生じ、前の如き廣漠亂雜なる表出跡をおさむるに至り、喜悅悲哀の表出の如きも多くは唯顔面の表出に止まり、身體全體の態度及び手足の運動には、著しき影響を與へざるべし。加之是等の顔面の

表出と雖も、特別の方法によりて表るゝにあらずして、味覺の顔面表出法によりて發表せらるゝなり。味覺の表出法は早くより自然に生ずる表出法なるが故に、之れによりて味覺に伴ふ感情と同種類の感情を有する情緒を表出するは蓋し一種の經濟法と云ふべし。是れ亦不必要なる運動の削減せらるゝ一例なりとす。

斯の如く情緒の表出に漸次制限の行はるゝは、一には一種の經濟法により、又一には心身の發達分化の結果によるものなるが、此の他に尙ほ一大原因あり。そは生存上の利害に基ける社交的淘汰作用是れなり。人若し情に激したるとき、之れを制することなく、其の儘之れを外部に表出するとき、他人の感情を害し、徃々不幸不利益の原因となるが故に、可成平

穩の狀を裝ふの習慣を生ずるに至るべし。是れ情緒表出の社交的淘汰作用の結果たるなり。然れども時としては過度の感激の爲め、沈著老練のものと雖も、常規を逸するの表出をなすことなきにあらず。但し無智無教育のもの程には、輕卒に陥らざるべし。

憤怒杯の情緒は概して制せざる可からず、如何にして之れを制すべきか。普通には先づ憤怒の有害無益なることを考へ、其の制止すべきことを明にし、之れを制御の動機となさんとす。又種々の方法を工夫するものあり、或る人は激情の發せんとするや直に一より十迄の數を數へ、或は彌陀の稱號をさへ唱ふるものあり。是等は或る點迄は効を奏すべし。然れども斯の如く豫め動機を考へ、或は方法を工夫し、之れを應

用せんとするが如きは、之れ觀念なり知的作用にして、激情が實際に發現せんとするに際しては、殆ど之れを適用するの暇なきが如し。此の點に於ては、人々によりて大に差異あり、或る人の如きは何等かの形式にて情を外部に發せざれば止まらず、茲に於てコップ又は茶碗杯を投げ付け、以て之れを醫するを得と云ふ。激情を制止せんとするは、強烈なる神經興奮が運動中樞を刺戟せんとし之れに向つて發射せんとするを中止せんとするものにして、容易の事にあらず。如何なる程度迄制御し得るか、は人々の體質によりて定まるものゝ如し。

一般に云ふときは、激情は制御せざる可からずと雖も、情緒の發作及び其の表情を過度に禁壓するは、極めて不自然にして、社會及び自己の發展の爲め不利益と云ふべし。眞正の禮

儀は適當の表情に基かざる可からず。喜怒色に現れざるもの、表情の過度なるもの、所謂ネヂレて反對の表出を爲すもの、何れも健全なる自然の發達にあらず。情緒及び其の表出が自然にして適當ならんが爲には、種々の事情整はざる可からず。即ち身體の健全なる發達、教育及び生活程度の進歩を要し、一般社會の發達を要す。

#### 第五節 情緒表出の因果論

情緒には各種類に應じて夫れ々相當の表出あり、是れ已に前に述べたる所なるが、さて是等の表出は果して情緒なる精神作用の結果なりや如何。從來の一般の心理說及び通常人の考ふる所によれば、表出は情緒なる内面的精神作用の結果にして、情緒は其の原因たるなり。是れ久しく信ぜられた



る見解にして、誰も別に疑ひを容れざりしが、現今の心理學者中には、外部の表出を内面的情緒の原因なりと論ずる一派あり。此の派に屬する學說を外周說と稱し、之れに對立するものを中樞說と云ふ。

中樞說によれば、悲しきが故に泣き、嬉しきが故に笑ふなり。然るにジエムス氏等の外周說の云ふが如くんば、悲しきが故に泣くにあらずして、泣くが故に悲しく、嬉しきが故に笑ふにあらずして、笑ふが故に嬉しと云ふ。此の說一見奇なるが如しと雖も、仔細に考察するときは、決して虚誕の說にあらず、緻密なる觀察に基きたるものなるを知るべし。例へば悲哀の情緒につきて考ふるに、其の内容中に多くの一般感覺あり、是等の感覺は呼吸の速度及び血液循環に於ける變化より生じ、

其の他泣く事及び泣く前後に生ずべき諸種の生理作用より生ずるものにして、是等の感覺は悲哀の情緒の重要な要素なるが故に、是等の感覺生ぜざるときは悲哀の情緒完成せず。是れ情緒を其の表出の結果と見做す所以なり。然れども此の説果して眞なりや否や議論の存する所なり。但し結局は情緒の内容の範圍につきての議論に歸著するものにして、情緒の本質の定め方に屬し、定義の問題に終るなり。著者の見る所によれば、情緒の本質は一般感覺及び其の感情にありて存し、表出に重きを置かざるべからず。

茲に喜悅の情緒を起すべき音信ありとせんか、先づ其の手紙の知覺表象あり之れに伴ふて感情生ずべし、之れ情緒過程の第一段なり。次に之れに連れて種々の觀念活動し、又之れ

に伴ふ感情生ずべし、之れ第二段なり。而して此の第二段の後期中に笑顔表れ、呼吸の速度強弱及び血液循環の状態に變化を生じ、從つて顯著なる一般感覺生ずべし。第二段以後には情緒は静かなる感情状態に移り、終に消滅するか或は他の情緒に引き續くべし、之れ情緒過程の第三段なり。外周説によれば情緒の本質は、前記第二段後期中の一般感覺にあり、喜悅の喜悅たる所實に之れにありて存す。中樞論者は第二段前期中の觀念活動の感情を情緒の本質と見做すなり。

情緒の本質は表出の一般感覺及び其の感情にあるが故に、假令悲哀の場合にも、強て快を装ひ、口笛杯試むるときは、大に不快を減じ、若干快に移らんとする傾向生ずべし。又喜悅の場合に悲哀の表出を試みば、不快に移らんとするを経験すべし。

されば情緒は表出を變ずることによりて、之れを左右し得べし。之れ情緒制御法の第一要義なり。

唯識論の心理

唯識論にては心作用を大別して心王心所の二となす。而して心王は更に眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識、末那識、阿頼耶識の八識に別れ、其の中前の五識を前五識と稱し、意識を第六識、末耶識を第七識、阿頼耶識を第八識と稱す。心所は又遍行ノ五種(作受、觸、想、思)と別境ノ五種(欲、勝、解、念、定、慧)と善ノ十一種(信、慚、愧、不放逸、精進、輕安)と本惑六種(貪、瞋、痴、慢、疑、惡見)と隨惑廿種(忿、恨、惱、覆、嫉、慳、誑、憍、沈、掉、舉、不信、懈、怠、放逸、失念、散亂、不正知)と不定四種(悔、睡、尋、伺)との五十一種に分る。

今心王の前五識につきて述べるに、前五識は各特有の根を有し、各自一境宛を彖す。即ち眼識は眼根によれる色境を

象し、耳識は耳根によれる聲境を象し、鼻識は鼻根によれる香境を象し、舌識は舌根によれる味境を象し、身識は身根によれる觸識を象す。

又唯識法相の教理には、心意識の三者の區別あり。抑識とは了別の義とし種々分別する作用にして、新心理學の知覺に近し。然れども識は單に知覺作用のみにあらず。知覺は感覺機官上の作用なれども、識は更に内面の精神作用をも包含す。意は思量を義とし思想作用に相當す。心は集起を義とし一切の諸法を集め起す作用の總體を指すものにして、舊心理學の心體に配するも可ならん。故に此の心なるものは心體及び之れに附隨する總ての作用を包含するものとす。而して是等心意識の三者を心王の八識に配

當せば、眼耳鼻舌身意の六識は識に相當し、第七末那識は意にして、第八阿羅耶識は心なり。

眼耳鼻舌身意の六識は識に相當すと雖ども、其中前五識は外に對する知覺にして、第六意識は内外二方面の作用を有す、即ち一は五共の意識にして、他は獨頭の意識なり。前五識と共に外界を知覺するときを五共の意識と云ひ、第六意識のみ獨立して内部を知覺するときを獨頭の意識と云ふ。されば前五識のなき場合と雖ども獨頭の意識はあり得べし。實に第六識は極睡眠、極悶絕等の場合を除きては、常に萬法を分別す。然るに第七及び第八の二識に至りては、如何なる場合に於ても其の作用絶ゆることなしと云ふ。次に八識を善性惡性無記性の三性に配當せば、前六識は善

性たり得べく又悪性たるを得べし。無記性(中庸性)に二種あり、一に有覆無記二に無覆無記是れなり。第七識は有覆無記にして、第八識は無覆無記なり。第七識は飽迄我他彼此の差別に固着する性質にして、理を覆ふが故に、有覆と云ふ。而して分明に善とも限らず、又悪とも断定し難きが故に、無記の名を附す。然れども元と物に執着して浸染する性質なるが故に、寧ろ悪の方に近し、細悪と見るも可なり。所謂煩惱の根本なりとす。第八識は純然たる中庸性にして、恰も水の湛然として清めるが如し。然れども第七識の悪影響を受け、薰習の理によりて悪習を受け得べし。前六識は是等の悪影響を受くるときは悪性となり、設し善の影響を受くるときは善性を強むべし。

此れより心王と心所との關係を述べん。曩に心王心所と云ひしが、此の語の中の心なるものは前の義解によりて共に分別慮知するの性を指すなり。即ち其の作用を爲すに方り、必ず目前に種々の客觀的萬有を集め起し、此の萬有を分別慮知するの心性を云ふ。心王とは其の中主となり根本となる心を云ふものにして、宇宙萬有の現象に對して能く其の總相を感受する心性作用なり、猶ほ感覺及び知的作用の如し。即ち前五識は感覺又は知覺にして、後三識は高等知的作用なり。心所とは伴類となり從臣となるの心を云ひ、心王に附屬して起る心性作用にして、常に宇宙萬有の總相を感受するのみならず、又萬有の上に於ける別相をも感受するなり。

總相とは主觀の心性作用が客觀の萬有に對して作用を惹起するに方り、其の中の根本(心王)的たるものを云ふ。萬有に又體相義相ありと云ふが佛教教理にして、其の中心王の感受する體相とは、例へば眼識が青色に對する時此の青色の物體を觀て、之れは青色なりと了別するの狀態を云ひ、總相に符合す。此の青色の體性の上に各自の嗜好に因りて好惡を生ず。即ち自己の嗜好に適する色には愛情を起し、之れに反する色には憎情を起すべし。然るに是等のものは皆萬有其の物に固有のものにあらずして、只物體の上に具ふる一の義相なり。是等貪愛憎惡の作用は心所の働きのなりとす。

以上述べたる心性作用中總相を感受する作用を心王と名

くる理由を詳説せんに、是れ全く比喻を以て命名したるものにて、心王が萬有の總相を感受する作用は恰も國王の國を統率するが如しと云ふにあり。又其の心性作用中心王に附屬して起る作用を心所と名くる理由を再説せんに、是れ心王所有の法と云ふことにて、恰も百官百僚の臣民は國王の所有者たるが如しと云ふにあり。唯識論五<sub>十二</sub>云助成心事得心所名、如畫師資作摸填彩<sub>スルカ</sub>とあり。此の論を解釋せる疏五末<sub>三十七</sub>云師謂博士資謂弟子如師作摸畫形況已弟子填<sub>ト</sub>采<sub>ヲ</sub>於摸填不離摸故如取總相著采色時令媚好出如亦取別相云云とあり。恰も畫家が黒炭を以て始めに物體を摸形し置き、之れを主として種々なる彩色を施すに似たるなり。又唯識論卷五<sub>二</sub>云恒依心起與心相應、繫屬於心、故名心所、云

云とあり。第一恒依心起とは心所の作用は必ず心王を所依とし、心王の力によりて惹起せらる、若し心王作用の發起せざる時は、心所の作用は決して發起するものにあらずと云ふ意なり。第二與心相應と云ふ事に關し以下に述ぶる四事の心王心所相應する義あり。即ち一に事平等、二に所依平等、三に所緣平等、四に時平等是れなり。一に事平等とは體平等と云ふ意にして、心王起るときは其の體一物なるを以て、之れと相應する心所も亦、各其の體一物づゝならざるべからず、例へば耳識に聲を聞くときは、彼此の聲を一時に聞き分ること能はざるが故に、心所も亦彼此干涉すること能はざるが如し。二に所依平等とは心王と心所とは必ず依止するところを同一にすと云ふ意味にて、眼識が眼根

に依れば之れに附屬して起る心所も亦、必ず眼根に依らざる可からずと云ふものは是れなり。三に所緣平等とは心王心所は常に依止する所共に同一なるのみならず、客觀の萬有を觀る上に於ても亦必ず同一にて、決して彼此別るゝものにあらずるなり。即ち心王が或る一物に對するときは、之れと相應する心所も亦同じく其の一物に對すと云ふものは是れなり。四に時平等とは心王心所は必ず同時に起るものにて、決して前後して起るものにあらずと云ふものは是れなり。若し心王心所互に時を異にするときは、縱令依止する所を同くし又同一の對境に向ふも相應と云ふことはざるなり。第三繫屬於心故名心所と云ふは、心王心所は恰も一家の主人他行するに伴侶ある如く、始終相離れざる

を以て斯の如く名くと云ふ意なり。  
以上の三義により心所と名くる所以を説明したり。抑唯識論の心理につきては、現今の心理學研究の結果に基き批難すべき所多々あれども、佛教の心理説は純然たる科學的研究法に基きたるものにあらずして、他に宗教倫理の目的を有するものなるが故に、嚴密に論評するは稍酷なるが如し。實驗心理學上頗る興味を感じるは、心王と心所との關係是れなり。心所は多くは感情若くは意志作用なるが故に、心王と心所との關係は、知的作用と情意との關係として論評するを得べし。

## 第二十一章 美的感情

美的感情の性質につき、一説には美的感情は感覺なりと云ひ、又一説には愛情なりと云ひ、又一説には少しも利害の觀念に關せざる感情なりと云ふ。其の他美的感情は快にも不快にもあらざる一種中庸の感情なりと論ずるものあり。然れども是等の諸説は何れも批難を免れざるべし。

第一、美的感情は無論感覺と稱するを得ず、感覺と感情とは自ら區別あり。第二、美的感情は愛情の如き複雑なる特殊の情緒に限れるにあらず、多くは愛情よりも單簡にして、且つ之れよりも知的感情の如き客觀的感情に近きものなりとす。第三、危險なるものが美的感情を生ぜざる所より見れば、此の

感情は毫も利害の觀念に關せずとは云ふを得ず。第四、美的感情は中性的感情にあらず、快感なること明なり。固より苦感にあらず、但し時としては苦感の加はり居る場合なきにあらずと雖も、是れ唯一小部分に過ぎずして、一般には快感たるを失はざるなり。

美的感情は快感なりと雖も、總ての快感は美的感情なりと云ふを得ず。例へば氣分よき時には快感あれども、是れ美的感情にあらず。天、鶯絨の如き柔きものに觸るれば心地よく一種の快感を生ず、されども是れ亦美的感情にあらず。快感にして美的感情となり得べきものは相當の客觀的内容を有せざる可からず。即ち相當に知的作用加はり、多少新觀念と舊觀念との類化作用を含むものならざる可からず。故に單

に印象を與ふるに止まり記憶を起さず、想像をも生ぜざるが如き事物は、假令快感を生ずるも美的感情生ずることなし。然れども知的作用過度に加はる時は、純粹の知的感情となるが故に、美的感情とはならず。主觀的興奮過度に加はるときは、喜怒哀樂等の如き純粹の情緒となるか或は欲望又は意志作用となるが故に、是れ亦美的感情とはならず。されば美的感情は、純客觀的知的作用と純主觀的興奮との中間の作用より生ずべき中庸の快感たるなり。然れども單に一時の中庸の快感は、美感と稱するに足らず。美感は長く持續すべき性質を有せざる可からず。故に變化のみ多く、過度に複雑にして、知的作用に障礙を與へ、永く接するに忍びざるが如きものは、美的感情を生ぜず。されども過度に單一なるときは、所



要の客觀的内容を缺くが故に、是れ亦美的感情を生せず。之れを以て美物たるべきものは、變化と統一とを兼備したるものならざる可からず。即ち相當の變化ありて所要の客觀的内容を與へ、而も統一ありて認識し易く、且つ後に至りて再現せしめ易くして、永く認識するに堪へ得べきものにあらざれば、美感を生ずることなし。是れ音樂、彫刻、繪畫、建築等に於て變化と統一との必要なる所以なりとす。

美的感情は通常人の考ふるよりも廣く且つ深く事物を支配する感情にして、其の影響も亦甚だ廣大なり。されば日用の簡單なるものにて、此の感情の支配を受け、其の影響を蒙らざるはなし。然るに感動的的美感は人の皆な認むる所なれども、單一にして冷靜なる美感に至りては、多くは人の注意を

受けずして、見過ごさるゝを常とす。由りて以下少しく此の種の美的感情につきて述ぶべし。

例へば机又は簡單なる箱の如きものと雖も、其の縦横の寸法が或る一定の比を保たざる時は、恰好悪しきものとして不満足を感じ、所要の比を保つときは恰好善しとして、直に満足を感じるにあらずや。斯の如き制裁は即ち美的感情の支配より生じたるものにして、恰好善しと認められたる縦横の寸法は即ち美の理想の客觀的に表れたるものと云ふべし。設し斯の如き美的感情の制裁なきときは、物品の形狀に制限の生ずべき根據なかるべし。然るに物の形狀には自ら歸する所あり、自他共に認めて好しとする所あるにあらずや、是れ自他一般に共通の美の理想なるものあり、美的感情の制裁な

るものある證にあらずして何ぞや、

されば美の理想なるものは、複雑なる美物に限りて表るゝにあらずして名刺の如き簡單なる物の形狀に於て表れ、嘗に之れのみならず、黄金比例の如き至極簡單なる直線の區分法に於ても表るゝなり。

今或る長さの垂直線を二つに分つとすれば、如何なる點にて區分せば最も格好良きか、ツァイジングの研究の結果によれば、全部の大部に於ける比は、大部の小部に於ける比に等しきとき最も美感を満足せしむ。故に「 $\frac{1}{2}$ を大部とし」を小部となすときは、 $\frac{1}{2} = \frac{1}{2} \parallel \frac{1}{2}$ は所要の區分法なり、之れを黄金比例と云ふ。

## 第二十二章 崇高の感情

崇高の感情は一種の美的感情にして、宗教的感情と密接の關係を有す。此の感情を起すべきものは、非常なるエネルギーを含みたる偉大なるものにして、若し之れが害を加ふとすれば、頗る危険と感じ、之れに反して若し己れの保護となるときは、頗る心頼みになると感ぜしむるものなり。されば崇高の感情の中には四種類の要素を含む、即ち第一驚きの情、第二珍奇の情、第三畏怖の情、第四安心の情是れなり。然るにヘフチングは驚きの情と畏怖の情との二種より成ると考ふ。

崇高の感情を起すべきものは、通常見慣れ居るものとは異なる、偉大なるものなるが故に、斯の如きものを突然見る時

は精神作用一時壓倒せられ、爲に驚きの情生じ、常に見慣れざる偉大なる物なるが故に、珍奇なり不思議なりと云ふ感情生じ、而も斯の如きもの若し自己に害を加ふとすれば、非常に怖るべきものなりと感ずるが故に、畏怖の情生ず。固より斯の如き觀念は明瞭には起るに非ず、唯暗々裡に生ずるなり。されども容易に己れの害にはならずと信ずると同時に、自己の保護となると感ずる所より安心の情生ず。是等の感情は極めて短時間に起り、互に密接に結合し、るものなるが故に、崇高の感情は複合感情なり。其の中畏怖の情は不快感なれども、珍奇の情と安心の情とは快感なるが故に、驚きの情は快にあらざる不快にも非ざる中性作用とするも結局快感の方多し、故に崇高の感情は一般に云へば快感なり。されども單純な

る快感にはあらずして、畏怖の不快感加はり居るが故に、所謂凄みを帯びたる快感なり。

例へば海邊の數百丈高き斷岸絶壁の下に小舟を泛べ、之れより其の絶壁を望む時は崇高の感情生ず。然り斯る斷岸絶壁はエネルギーとして、非常なる分量を有し、若し其の壓に觸るゝ時は如何なるものにて、押し倒され、自己及び自己の小舟の如きは分厘の抵抗力をも有せず、微塵となるは必然なりと感ずる所より若干畏怖の情生ず。然るに此の斷岸絶壁は太古以來大風雨大地震に遭遇したるも依然として存在する所より見れば、容易に倒るゝものにあらずと云ふ思想が極短時間に生ずるが故に、左程恐れざるのみならず、斯の如き大なる岩の下に居る時は、如何なる暴風雨あるも無難なるべし

と信ずる所より安心の情生ず。又最初之れを一見したるとき、コレハと云ふ驚きの情起り、珍奇の感生ず。是れ崇高の感情生ずる所以なり。

前に述べたる如く此の感情を起すべきものは偉大なるを要するが故に、一見して全體の大きさを見測る事能はざる如き物は此の感情を起すに適す。されば薄暗き廣大なる洞穴に臨む時の如きは、一種の崇高の情を生ず。

研ぎ澄ましたる刀劍の如きも、幾分此の感情を起すべき要件を具ふ。されども充分には之れを具へざるが故に、純然たる崇高の情は起さず。刀劍の如きは日常取り扱ふ處の器具とは異なり、之れを見る時は驚きの情生じ、又懼はし見たしと云ふ好奇心生ず。而も若し之れを揮つて撃を爲す時は、貴重

なる身命を奪ふの力を有するが故に、畏怖の情を生ずれども、又一方に於ては保護になると云ふ觀念起るが故に、安心の情生ず。斯の如く崇高の感情を起すに必要な要素略ぼ具はると云へども、最も大切なる偉大の要素を欠き、如何なる名刀と雖ども害を及ぼすべき力の分量に餘程の制限あるが故に、斷岸絶壁に對したるとき、の如き畏怖の情起らず、従つて純然たる崇高の感情生ぜざるなり。

崇高の感情は常に物質に限りて生ずるにあらずして、性格を有する者に對する時にも亦之れを生ず。例へば專制政治時代の君主の如きは生殺與奪の無限の權力を有するが故に、一旦其の怒りに觸るゝ時は此の上もなき恐るべきものにして、畏怖の情を起さしむ、されども一方には保護となるが故に、

安心の情を生ず。而して固より通常の人に接するとは異なるが故に、一種の驚きの情と珍奇の感を生じ、斯の如くして崇高の感情を生ず。然るに其の君主の権力が強きに過ぎて暴力となるときは、畏怖の情のみ強度を加ふるが故に、崇高の感情は起さざるなり。

又宗教の本尊たる神佛の如きも崇高の感情を起すべき性質を有す。神佛は或る點より云へば賞罰の本體なるが故に、畏怖の情を起さしめ、又其の保護を蒙るときは何者の保護よりも確實なる故に、安心の情生ず。而して又一種の驚きの情と珍奇の感あり。然るに宗教の本尊たる神佛なるものは、其の宗教の發達の度合によりて大に其の性質を異にし、一般に云へば進化したる宗教ほど其の本尊の性質には、慈愛の性質

主となるが故に、安心の情多くして畏怖の情少く且つ普通人民に頗る接近し居るが如き感ある故に、驚きの情及び珍奇の感を起すこと少し。然るに古代に溯るに従ひ其の時代の宗教の本尊には、正義の念主となり、賞罰の支配重きを加ふるが故に、畏怖の情を生ぜしむること多く、其の他の三の要素を生ずること亦近世の宗教の本尊よりも多し。故に崇高の感情を生ぜしむるに適す。主權者も亦これと等く、政體の進化するに従つて漸次人民に近づき、権力に制限加はり來るが故に、近世政體の君主は崇高の感情を生ぜしむること少く、敬愛の情を生ずること多し。蓋し種々の法律を制定し憲法を發布するに至りては、それだけ主權者の権力に制限附き來るが故に、畏怖の情を起さしむること少ければなり。

主權者及び宗教の本尊が崇高の感情を生ぜしむるのみならず、神社佛閣宮殿等も亦此の感情を生ずるに適する構造を有するものあり。元來祀らるゝものゝ性質と祀る處とは一致すべきものにして、莊嚴なるものを滑稽なる處に祀れば矛盾して權衡を失す。故に崇高なるべきものは、崇高の感情を起すべき所に安置すべし。是れ神社佛閣宮殿等の此の感情を起す様構造せらるゝ所以なり。然るに是等の神社佛閣及び宮殿の構造も亦、其の本尊たる主權者又は神佛の性質と共に變化するを常とす。古代の神社佛閣は一般に言へば、神々として莊嚴なり。近代の神社佛閣は然らず。宮殿の構造にも亦斯る變遷あるを見るなり。

## 滑稽の感情

滑稽の感情は現に見聞する所の事物の知覺が、其の事物の通常概念と矛盾する時に生ずる感情なり。此の感情を起す要件の一部は、崇高の感情を起す要件の一部に類すれども、亦大に異なる所あり。即ち意外と感ずる所より生ずる點に於ては、相類似し、従つて驚きの情及び珍奇の感を包含す。然れども偉大の要素必要にあらず、故に畏怖の情及び安心の情を含まざるなり。

上杉景勝は生來笑はざる癖あり、侍するもの笑はせんと種々工夫したれども、如何にしても笑はず。然るに或る時景勝の書齋の前庭にありし木の枝の上に、猿の衣冠を着け嚴かに構へるを見たり、茲に於て景勝思はず笑ひしと云ふ。之れ普通の猿の概念によれば、猿なるものは山間の樹木の

間に棲息するものにして、庭の木の枝の上に留まり、而も衣冠を着け、嚴かに構ふるが如きは、其の概念中に毫も存せざるなり、然るに現に斯る猿を實見したるものにして、現に知覺する所の猿と、猿に就ての概念との間に矛盾を経験する所より生じ、滑稽に堪へざりしによるなり。又高き禮帽を冠り盛粧して嚴かに歩行せる紳士あり、風のため俄に禮帽の吹き飛ばされ、紳士が之れを取り留めんと狼狽する有様を見る時は、滑稽の感情を生ずべし。之れ此の紳士の風采より見れば如何にも立派な嚴かなる人なりと云ふ概念を興ふ、然るに實際に於てはそれと反對なる狼狽したる有様を見るが故に、其の人の概念と實際の舉動との間に直接の矛盾を生ずればなり。

## 第二十三章 人格論

人格とは一個人に屬するあらゆる精神作用の統合したる全體と、身體との總體を指したるものなり。故に氣質の如き身體の状態と根本的關係を有するもの、及び精神作用相互間の統合状態の如何は、人格に直接の影響を興ふるものとす。

### 第一節 氣質

人格に影響を興ふべきもの、中、氣質の如きは其の重大なるものなり。知識の如きは觀念の種類を換へ、且つ其の數を増加するが如き教育法によりて、變更せしむるを得と雖も、氣質に至りては然らず。氣質は體質に基くものなるが故に、容易に變更せしむるを得ず。蓋し體質とは各個人の身體固有

の状態なればなり。氣質の種類は即ち斯の如き體質本となり、之れが感情及び意志作用に影響する所より生ず。氣質につきてはガレン氏始めて生理の上より之れを四つに分てり。其の後哲學者カントは血液の濃淡の度合と温度との關係によりて分類し、現今のツント氏は外部より刺戟を受くるに方り、之れに反應する遲速の度合と、其の強弱の度合とによりて之れを分類せり。然れどもガレン氏以後今尚ほ四分法行はる、多血質、氣鬱質、膽汁質、粘液質是れなり。

第一 多血質は刺戟に反應すること迅速なれども其の反應の力甚だ弱し、即ち事物を見聞し若くは事件に遭遇するときは、之れが爲に動かさるゝこと早く、而も其の反應長くは持續せず。畢竟感情的氣質にして、喜怒哀樂の變化甚し。されど

も一般に云ふときは、快活にして樂天家なり、従つて事件の難點を感じること少く、若し他より事を依頼さるゝときは、假令躊躇すべき程の事件にても直に承諾す、但し其の事の成功するや否やに付ては深くは懸念せず。されば多血質は極端に走るときは輕躁に流れ、電同反抗なきに至るべし。

第二 氣鬱質を有する者は、刺戟に反應すること遅く、事を處理すること緩慢なり、彼れ此れ長く考へたる後に非ざれば何事をも決行することなし。されども一度決したる以上は、必ず之れを貫徹せんとするの執念強し。一般に云ふときは、喪沮して意氣昂らざるの風あり。此の氣質も亦極端に陥ち入る時は、事物に執着するの傾向強きに過ぎ、過度の懸念に悩まされ、甚だしきは常識を失するに至るべし。精神病の初期は



概ね氣鬱的狀態にして、それより病的多血質、即ち噪狂となり、若くは純然たる憂鬱病となる。

第三 膽汁質は最も望ましき氣質なり。刺戟に應じて處辨すること速にして而も強し。即ち決斷速にして、且つ其の決心を實行するの勇氣に富む。古來の所謂英雄豪傑は概ね此の氣質を有せり。

第四 粘液質は老朽の徵なり。刺戟に應じて之れに處すること緩慢にして、且つ決心の實行甚だ微弱なり。斯の如く氣質は之れを四種類に分ち得と雖も、吾人は是等の中唯一種の氣質を有するものにあらず。時としては氣鬱質に傾き、又時としては多血質に傾くことあり、唯是等の變化の中に自ら主となるべき氣質あり、他に抽んで、著し。吾人の

氣質なるものは即ち此の如く主たる氣質を云ふに過ぎず。又各個人の一生は氣質の上より考ふるときは、若干の時期に分ち得べきものにして、其の各時期には之れに主となるべき氣質あり、即ち兒童期にありては多血質的興奮性を有し、青年期にありては刺戟に感應すること兒童期に於けるよりも遅く、而も強く且つ往々氣鬱質に傾きたる氣分を有す。成人期に至り性格の熟したる時は、其の判斷及び行爲一般に速にして且つ確實強固なり。老人期に至れば緩慢微弱殆ど沈止の狀態となるべし。營に各個人に固有の氣質あるのみならず、各國民にも亦特有の氣質あるが如し。米國民の如き新進の國民は概して多血質に近く、支那人の如き老朽國民は粘液質に近しいといふ説あり。其の他英佛獨露等の諸國民各々多少

氣質上の特質を有するが如し。

### 第二節 人格の變化

總て精神作用は人の常態にありては、必ず互に統合し居るものなれども、一旦或る病的状態に陥るときは、相互の間に統合を缺き、一種の變狀を來し、爲に意識内容の分裂を生ずべし。而して意識内容分裂するときは、其の特徴として記憶を失ふの度非常の程度に達し、其の自然の結果として一個人にして、一個以上二個又は數個の人格を生ず、即ち人格の變化を生ずるを見るなり。

人格變化の例證は擧げて數ふ可からず。唯茲に數種の場合を示さんに、佛國人にフェリダなるものありしが、此の人時としては厭世家にして、屢々自殺を企て其の性質又利己的にし

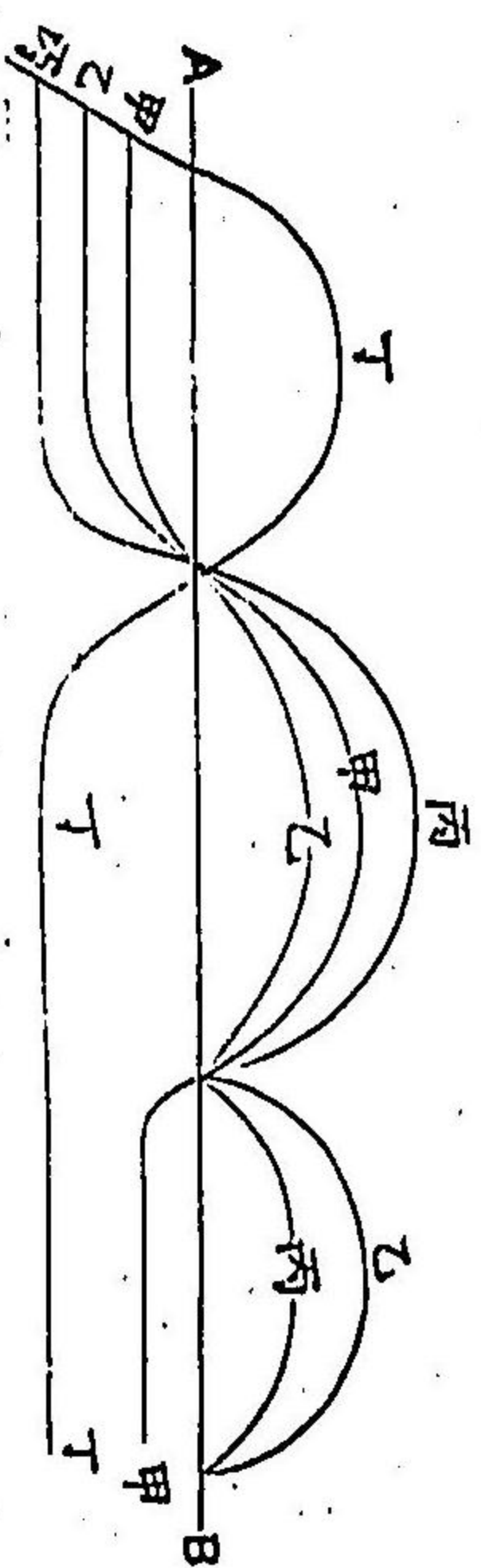
て、事物に冷淡なり。然るに時としては状態全く變じて樂天家となり、氣象活潑にして甚だ勇氣あり、其の性質又利他的にして、事物に熱心となる斯の如きは是れ二種の人格を有するものと云ふべし。又佛國ルイ第五世は時としては、柔和從順にして小膽なれども、時としては様子全く變じ、粗暴強硬にして其の上甚だ大膽なり。恰も婦女子の如き時あり、又之れに反して意氣豪邁なる大丈夫と見ゆる時ありきと云ふ。是等は生理状態の激變より氣質にも激變を生じ、之れが爲に別人の如き二重の人格を表すものにして、或心理學者の所謂實質的統一の缺乏したる實例なり。

意識の統一は之れを分ちて實質的統一と形式的統一となすを得べし。形式的統一とは、精神經驗の一般の特質として

の統一或は統合にして、前に已に之れを述べたり。實質的統一とは一定の性格を中心として、總ての精神作用及び外面的行爲が之れと統合したる状態をいふ。ルイ第五世及びフェリダの如きは性格變化して一定する所なきが故に、實質的統一を欠けり。されども彼等の甲人格と乙人格との間には、記憶上の統合存するが故に、形式的統一は尙ほ存在すと云はざる可からず。然るに更に一段進みたる病的状態に陥ち入るときは、遂に形式的統一をも失ふに至る。今二三の例を擧ぐれば、英國の心理學者マイエルの報告に據れば、曾て一人のヒステリヤ患者あり、頗る希臘語に通じ居たりしが、一日或る事情の爲に激しき感動を受け、一時無意識となり、暫時にして覺醒せしと雖も、其の時より全く希臘語を忘却せり。然るに其

の後又或る事件の爲に激烈なる感動を受けしが、其の時より頗る前の希臘語の記憶を回復し、恰も突然語學の力を授けられたるもの、如く感じ、患者自身も不思議の感に堪へざりしと云ふ。斯の如きは感動を受けし前の意識の状態と、其の後の意識の状態とは、少くとも言語の點に於て分離して二となりたるものにして、其の間に連絡を欲き、記憶上の統合を有せざるなり、即ち形式的統一をも失ひしものと云ふべし。又佛國の精神病學者ベルツランの報告に據れば、氏の取扱ふ患者の中に十四歳の女子ありしが、此の女子は往々四種類の神経病態に陥ち入ることあり、即ち第一は覺醒中に起る一種の神経病態、第二は或る神經病の激發、第三は自然的睡眠行動を生ずる病態、第四は人爲的睡眠行動を爲さしめ得る病的状態是れ

なり。而して此の患者に付きて殊に注意すべきは、是等の病的状態に在りても、智能の點に於ては毫も平生と異なる所なし、唯普通の健全の状態にありては、病氣中に見聞せしことを毫も記憶せず、更に不思議なるは前記四種類の病状態を順次に甲乙丙丁にて表すときは、丁病態にありては、甲乙及び丙病態中の自己の有らゆる經驗(自己の言行をも包含す)を全く忘却し、丙病態にありては唯甲乙病態中の經驗を記憶するに止まり、丁病態中の經驗は全く知らず、而して乙病態にありては唯僅に丙病態中の經驗を記憶するに止まり、甲丁病態中の經驗は一切意識せずといふ、今之れを圖にて表すときは即ち左の如し。



第十圖

圖中A B線は識域を表し、それ以上に於ては意識あり、それ以下に於ては意識なしとす。圖にて見る如く甲乙丙の三病態の間には記憶上の統合あり。然るに丁病態は是等の三病態と全く分離し、健康體にありては四種類の病状態と分離す、斯の如きは則ち形式的統一の缺損したる實例なり。統一の純然缺損の結果として、意識の範圍種々に分離し、爲に同一人にして自己の知らざる自己の人格を生ず。ヒヤージェャネ、J氏

も亦患者ルイシーにつきての實驗により、ベルツランの患者と同様の事實を發見せり。

統一缺損には程度の差あり、前に述べたるルイ第五世及びフエリダの場合の統一は不完全なれども、純然たる缺損にはあらず。然るにマイエル及びベルツランの患者の如きは、純然たる統一缺損の場合なり。此の他に是等の中間に立つべき統一缺損の場合あり。患者レオニーの如きは即ち其の一例なり。レオニーは神経病患者にして、二つの人格を表すことあり。或る時彼れ自身の寫眞を見せしに、不思議なる哉此の寫眞の人は自分の如き帽子を被り、又自分の如き衣服を着し居ることよと叫び、大に驚きしと云ふ。若し寫眞を取りたる時の自己と、現在其の寫眞を見居る時の自己との間に十分の

統一存すとせば、自分の如きとは云はずして直に自分の寫眞なりと云ふべし。之れ統一の不完全を證するものに外ならず。されども純然たる缺損ならざるは、寫眞に類似を認識する事によりて明なり。斯の如き二重人格は實質的統一の缺乏よりも深く、純然たる形式的統一の缺乏よりも淺く、是等の中間に立つべき缺損より生ずと云ふべし。

人格は精神作用の統一状態を要件となすが故に、人格をして完全ならしめんが爲には、あらゆる精神作用を發揚し、且つ之れが統合を密接にすることに力めざる可からず。教育上の思想は着々此の原則に向つて進みつゝあるが如し。所謂禁欲主義の如きは明に此の原則に反すと云ふべし。但し統一の範圍廣く且つ其の統合の度合密接なりとする

も、統一に權衡を失する時は不完全なる品性を生じ、多くは有害の結果を生ずべし。即ち思想豊富にして感情慾望杯發達し、又是等の思想及び感情克く統合したる場合ありとするも、其の中一二の慾望或は感情が過度に強く、例へば過度に權力を望むの癖あり、或は過度に財産を貪る癖ありて、他の精神作用との權衡を失するときは、有害なる結果を生ずべし。されば斯る場合には過度の慾望を抑制する必要あり、當に慾望のみならず或る點迄は有益なる精神作用と雖も、適當の統一を保たんが爲には之れを抑制する必要生ず。斯の如き消極的必要のみを見て、之れを極端に及ぼしたるもの即ち禁慾主義なり。されば此の主義は其の動機の幾分は確實なる根據を有すれども、一般に云ふときは健

全なる教育思想と相容れず。假令精神作用が若干權衡を失したる場合に於ても、過度に至らざる以上は、統一の密接なると其の範圍の廣きとによりて、不權衡の難點を償ひ尙ほ餘りあるが如し。

## 第二十四章 意志

感覺の如きは其の起源より云ふときは、外部の感覺機官の興奮より始まると雖も、意志は之れと異なり内部の腦髓の中樞より始まるものにして、腦髓中樞に於ける一種特別の神經興奮に基くと云ふ。是れ即ち一派の中樞論者の說なり。然れども何故に斯の如き中樞的興奮を假定せざるを得ざるか、抑何によりて意志なる一種の精神作用の存するを知り得る

かと難せば、中樞論者答へて云はん、例へば文字を善く書かんと力むるときは努力を要し、努力の感を生ず、此の感情こそ即ち意志の存する證なれど。然るに文字を善く書かんとするが如きは、已に復雜なる意志作用なるが故に、斯の如き場合の努力の感のみにては、未だ以て意志の起源を知るを得ず。されば可成單一なる精神作用につき、單一なる意志なるもの、存するや否やを明にせざる可からず。

總て不快感を有するときは自ら之れを避けて快感を得んとする努力生ずべし、此の努力の單一なるもの之れを衝動と云ひ、單一なる意志作用なり。されば意志の根元は不快の感情に含まるべき衝動にあるなり。例へば鷹が小鳥を見るや、直に之れを攫取せんとするが如きは即ち衝動にして、單一意志

作用たるなり。さは云へ固より總ての不快感は意志作用を生ずるにあらず、只努力を起し衝動を生じたる場合に限りて、意志となるなり。蓋し時としては或る事情の爲め努力又は衝動を生ずるの暇なく、單に不快の感情として止むことあり。斯の如き場合にありては不快の感情は毫も意志作用を含まず、純然たる感情なりと云ふ。是れヴントの意志論の大要なり。

上述せし如く中樞論者は衝動を意志の根元となすと雖も、何によりて衝動が一種特別の單純精神作用なることを知り得るか。設し之れを認識すとせば、是れ感覺若くは觀念なり。設し又之れを感じずと云はんか、是れ感情なり。されば是等の精神作用の外に、別に意志即ち衝動に符合すべき單純精神作

用あることなし。稍複雑なる場合つきて云ふも、努力の感なるものは運動感覺に外ならず。前の例につきて云へば、文字を善く書かんとするときは、運筆に伴ふて運動感覺生じ、注意に伴ふて緊張の感覺生ずべし。然るに緊張の感覺も亦運動感覺中に含まるべきものなるが故に、努力の感は畢竟運動感覺に外ならざるなり。

次に反射運動と有意運動との發現上の順序につきても亦、中樞説と外周説との所論相異なれり。外周説より云ふときは、生物最初の運動は、亂雑なる反射運動なりしが、後に至りて、時々目的ある反射運動生じ、更に進みて知識發達するときは、一定の目的觀念に従つて反射運動を利用するに至り、茲に始めて有意運動生ず。而して有意運動は之れを反復練習すると

きは、習慣となりて再び反射運動となるなり。

然るに中樞論者より云ふときは、然らず、意志は已に單一なる感情の中に含まるゝが故に、假令單一なる生物と雖も感情を有する限りは、意志作用を有せざる可からず。されば最初に表るべきものは有意運動にして、反射運動にはあらず。反射運動は有意運動の反復練習せられたる結果なるが故に、却て後に表ると云ふ。斯の如く有意運動を反復練習するとき、反射運動となることは、孰れの論者も一致する所なれども、最初の運動が反射運動なるか、將た有意運動なるかと云ふの一點に至りては、彼れと此れとは全く相反對せるなり（意志論につき尙ほ詳細なることを知らんとせば、元良合譯、心理學概論第十四章を見よ）。



著者の見る所によれば、要するに意志は要素的精神作用にあらず。單一なる意志作用は存すれども、之れ感覺及び單純感情と並立すべき心的要素にはあらず。經驗上確實なる意識として現に吾人が有するものにつきて云ふときは、意志は之れを自覺的活動と定義するを得べし、即ち目的觀念なく受動的に行はるゝ精神作用と異なり、自ら覺悟したる精神活動なり。而して意志活動には内面的と外面的との二種あり。例へば注意して事を考へ、物を工夫するが如きは、是れ内面的意志活動にして、某の物を取り擧げんとして取り擧ぐるが如きは、外部的行爲は、是れ即ち外面的意志活動たるなり。但し意志は常に内面的活動なれども、外面的運動に關するるとき、之れを外面的意志活動と云ふ。

次に意志作用には單一なるものと複雑なるものと別あり。單一意志作用にありては其の目的も亦單一なるが故に、撰擇及び決斷等の如き作用現れずと雖も、複合意志作用に於ては是等の撰擇及び決斷の作用生ずべし。複合意志作用は若干の單一意志作用の結合したるものなるが故に、二個以上の目的觀念を含むなり。然るに多くの目的は之れを同時に遂行すること能はざるが故に、其の中にて必要なるもの勢力を占め、他は一時壓倒せられざる可からず。其の狀恰も競争場裡の如く、目的觀念の中の一は優勝の位置を占め、他は劣敗して退却すべし。即ち目的觀念の間に淘汰作用行はれ、終に其の中の一の觀念のみ残存すべし。此の全經過を撰擇作用と云ひ、一の觀念に歸着したる所は即ち決斷の付きたる時と知る

べし。

撰擇には遲速の別あり、又確實にして誤りなきものと、不確實にして誤りあるものとの別あり。速かにして失策なきは撰擇の上乗なりとす。決斷にも亦遲速の差と強弱の別あり、是等の差別は主として氣質の差異より生ず。

諸種の運動相互間の關係につきては、反射運動及び本能運動は有意運動にあらず。反射運動及び本能運動は有害なる刺戟を避け、有益なる刺戟に就く目的性を有するが故に、意志的なりと云はんか。一般に云ふときは斯の如き目的性の運動なりと雖も、有害なる刺戟に就く場合頗る多し、此の點に於ては有意運動も異なる所なし。吾人害を避けんと欲して行爲に注意するも、尙ほ且つ之れを免るゝを得ず。運動の結果の

利害は生物の外界に對する順應調節の適不適によるものにして、必ずしも有意無意の差別に基因せず。或は結果の利害を論せず、單に目的性の存在を以て意志存在の兆候となさんか。此の標準によれば、反射運動本能運動のみならず、無機物の運動も亦有意運動となるべし。斯の如きは意識の事實を根據とする經驗的心理學の見地を離れて、形而上學又は思辨的心理學の見地に移るものと云ふべし。有意運動は單に目的性を有するのみならず、目的としての感覺又は觀念を意識するを要す、之れ有意運動を他の運動より區別し得べき標準なり。唯實際に於ては目的の意識存するか存せざるか明瞭ならざる場合尠ならず、本能運動の中にも亦斯る性質のもの存するが如し。

## 第二十五章 反應實驗及びツロピヅム

## 第一節 反應實驗

意志過程の實驗的觀察は反應實驗に於て最も確實に之れを遂行するを得べし。反應實驗とは刺戟を受けてより之れを意識するや直に其の相圖をなす迄の全經過の實驗なり。而して此の經過は意志作用の摸範的過程なるが故に、意志作用を實驗せんとするに最も適したる事情なり。ツロピヅムは意志を外部の方面即ち生物の動作より研究したるものにして、反應實驗は之れを其の内部の方面より研究せんとす。故に反應實驗の心理學上主眼とする所は、動的意識の觀察にありと云ふべし。然るに此の實驗の發達歴史より云ふとき

は、反應時間の研究重きを爲せり。されば以下論ずる所も亦時間の方面に限らんとす。

反應時間とは刺戟を與ふ瞬間より相圖に要する反應動作遂行迄の時間を云ふ。反應は電氣のキイを押す動作を通例とす。刺戟より反應迄の全經過の作用は之れを五つに別つを得べし、即ち第一感覺機官の刺戟、第二神經興奮が感覺神經によりて腦髓の中樞に向つて求心的に傳播せらるゝこと、第三感覺中樞に於けるエネルギーより運動中樞のエネルギーに移る作用、第四神經興奮が運動中樞より運動神經によりて遠心的に傳播せらるゝこと、第五筋肉の收縮是れなり。極單一なる反應は反射運動に近きが故に、第三の作用は殆どなし。エツキスネルの説によれば斯る反應に於ては第三作用の代

りに、延髓に於ける求心的傳播と脊髄に於ける遠心的傳播との二作用を加ふべし。前記五作用の中第三作用は純然たる精神物理作用にして、其の他は生理作用に外ならず。試に被験者に向ひ、今色紙を示すべければ、見たるや否や直にキーを押すべし、何色なるかを認むるの要なし、唯見しとき可成早く反應すべしと命じたりとせよ。斯の如きは單一反應にして、此の動作たるや衝動運動なり。然るに注意の方向を異にするときは、時間にも亦差違を生ず。注意が刺戟に向ひ、見るときを過度に心懸けたるときは、此の場合の反應を知的反應と稱し、注意が反應することに集注せられたる場合には、之れを動的反應と稱し、注意が刺戟と運動とに等分に注がれたる場合には、之れを中性反應と稱す。視覚、聽覺、觸覺の三種につき、

知的反應と動的反應との標準時間を擧ぐれば即ち左の如し。

	知的反應	動的反應
視覚	二七	一八
聽覺	二三	一二
觸覺	二一	一一

右表中時間の單位は百分の一秒なるが故に、何れも三分の一秒に満たざる短時間なり。標準時間を之れよりも尙ほ稍短く考ふるものあれども、之れより短き場合には知的反應が動的反應に移りたるにはあらざるか疑ひなきにあらず。中性反應の時間は知的反應と動的反應との中間に位す、此所には之れを省畧せり。

設し又單に見たるのみならず、幾分其の色の性質を認識して

反應したる場合には、之れを認識反應と云ふ。

識別反應とは、被験者に向ひ、例へば赤紙と青紙との中孰れか一を示すべければ、赤色か青色かの識別の付きたる時直にキ一を押すべしと命じたるときの反應なり。單一反應時間をRを以て表し、純認識作用に要する時間をUを以て表すときは、認識反應全體の時間は $R+U$ にして、 $R+U$ なり。

而して純識別作用に要する時間をUを以て表すときは、識別反應の時間は $R+U$ にして、 $R+U$ なり。

選擇反應とは、被験者に向ひ例へば赤紙と青紙との中孰れか一を示すべければ、赤色を見たるときは右方のキ一を押し、青色を見たるときは左方のキ一を押し、と命じたるときの反應なり。此の反應にありては、識別作用の上に更に選擇作

用を要す、即ち色の種類に應じて孰れかのキ一を撰びて押さざる可からず。故に時間更に長し。Wを以て純選擇作用に要する時間を表すときは、選擇反應全體の時間は $R+U+W$ にして、 $R+U+W$ なり。

聯想反應とは、物體を見するか、或は文字を示し、或は言葉を發し、之れに附隨して觀念起らば直にキ一を押し、言葉又は文字にて之れを發表せよと命じたる場合を云ふ。此の反應にありては、認識作用をも含むが故に、Aを以て純聯想作用に要する時間を表すときは、聯想反應全體の時間は $R+U+A$ にして、 $A+(R+U+A)$ なり。概して云ふときは、聯想反應時間は最も長く、極めて簡單なる聯想作用にても約千分の三百秒を要す。

佛典に卒爾尋求決定等流の四作用の區別あり、且つ其の各作用に相當の時間を要することを説けり。卒爾は認識に符合し、尋求は識別、決定は選擇、等流は觀念聯合の作用に符合するが如し。されど時間の長短の研究は、未だ行はれざりしなり。反應時間の長短は、人の資性及び氣質と密接の關係を有す。實驗の結果によれば、氣質のものには認識反應の時間長く、機敏なるものは短し。但し酒類に酔ひあるものは、一見敏活なるが如きも、認識時間著しく長し。其の他、識別、選擇、聯想等の反應時間の長短は、氣質及び資性と密接の關係を有するが故に、是等の時間の差違によりて、人の性格の一般を知ることが得べし。男女の性の差異も亦反應時間の長短に表るゝ所あり。概して女性の反應時間は男子のそれよりも短し、殊に

感情の反應時間に於て然りとす。

### 第二節 ツロビズム

反射運動は有意運動の反復練習せられたる結果にして、其の起源は已に意志活動なりとし、或は之れを機械的無意運動なりとなすの差はあれども、孰れの見解によるも、反射運動の生理的基礎として、神経系統の存在を要す。然るに例へば夏の夜燈火を見るや、蛾の之れに突進直入するは、純然たる反射運動にして、蛾は神経系統を有すれども、之れ神経系統の爲に行はるゝにあらず、外面より來る光の刺戟の爲に生ずる必然の結果にして、全く刺戟の位置方向に規定せられ、燈火に突進直入せざるを得ざるなり。猶ほ植物の光線の方向に進み、バクテリアの液體の方向に進むと一般なり。されば神経系統

を有する生物の反射運動は、之れを有せざるもの、反射運動と異なる所なし、従つて反射運動に要するは唯興奮と興奮の傳播力とに過ぎざるが如し。斯の如き事實によりて考ふる時は、反射運動は外面的刺戟の位置方向によりて左右せらるる純然たる機械的運動なりと云ふを得べし、此の原理をツロビズムと稱す。ツロビズムに屬する運動に種々あり、而して各種類に又積極性と消極性との別あり。稀薄なる食鹽水滴をバクテリアの群集して游泳する所に注射するときは、バクテリアは此の液體を避けて退去すべし、之れ消極性ツロビズムなり。之れに反し刺戟の方向に進行するは積極性ツロビズムなり。概して有益なる刺戟に對しては、積極性反應を生ずれども、必ずしも然るにあらず。例へば一種のバクテリア

は死を來すべき毒液に對しても常に積極性ツロビズムを現し、或は死を來すも尙ほ高度の温又は低度の冷に積極的反應を現すを見るなり。

ツロビズムは主として動物の反射運動を説明せんとして起りしものなれども、人類の行爲中にも此の原理にて説明し得るもの甚だ多し。人の室内にあるや、自然に窓に近づくも亦其の一例なり。ロエブの如きは複雑なる本能運動も亦ツロビズムによりて説明し得と信ず。蝶の一種に物の間隙を求め、又は隠るべき物の隅を求めて止まざるものあり、斯る運動を自己保存の本能に基くと考ふるは、從來一般の説なれども、之れ物體に附着せんとするツロビズムなりと云ふ。又昆虫の中には適當なる營養物の存する所に其の卵を孵化するも

のあり、之れ本能なりと云ふと雖も、斯の如きは營養物の物體より來る化學的分子の刺戟によりて起れるツロビズムにして、母蟲が此の種の物質を求め、幼蟲も亦之れに向つて進行するは、全く化學的刺戟によりて必然に左右せらるゝ結果なりと、し或は又春夏の交草木の幹を傳ふて専ら上方へ昇らんとする昆蟲あり、之れ引力に對する消極性ツロビズムなりとし、其他鴈、燕等の移動本能も亦ツロビズムによりて説明し得ると云ふ、然り吾人が從來複雑なる作用を要すと考へし運動中には、ツロビズムにて説明し得るもの尠からず、簡單明瞭となるの點は多とすべし。然れども假令下等動物の運動と雖もツロビズムのみにては説明し難し、之れゼンニングス等の實驗の結果によりて明なり。例へばアミーバが有害の刺戟を

受くるとき、消極的反應をなして之れより遠ざかるは、全くツロビズムなれども、アミーバは之れに止まらず、體の前部より僞足を出し、設し尙ほ有害の刺戟に觸るれば、更に又新方面に僞足を出だして刺戟の存否を檢し、斯の如く數回新方面に試行して尙ほ同様の刺戟あるときは、體の位置を變じて刺戟が體の後部に當るに至らしめ、終に之れを避くるを得るなり。而して茲に注意すべきは、僞足は概して前面の或る部分より出て、稀に側面より現れ、後部より出づるは殆どあるなし、之れアミーバの體に於ける一時の分化状態によるなり。されば是等の運動は生理状態によりて左右せらるゝものにして、外部の刺戟の位置方向のみによりて定まるものにあらず。且又僞足の突出するは體内のエネルギーの溢出したるものに



して、之れ即ち衝動なり。而して再三新方面に僞足を試行するは、高等動物及び人類に於ける、試行及錯誤の法に符合するものにして、實際の意志作用の根本形式なり。意志が其の目的を達せんとして、之れを遂げ得ず、錯誤なることを發見するときは、更に新方面に試行し、目的を達する迄同様の活動を繼續すべし、之れ試行及錯誤の法と稱するものにして、斯る意志活動は外部の運動又は行爲に表るゝのみならず、内部の思考作用中にも行はるゝを見るなり。

## 第二十六章 意志行爲の動機

意志行爲の動機の大部分は慾望なり、慾望は意志の特別の場合に外ならず、即ち意志が其の目的を達せんとするに方り、

多少障礙を受け爲に直に満足するを得ざる状態を云ふ。意志にして設し直に其の目的を達するを得ば、慾望起らんとすも、其の機會あることなし。例へば山路を通行し飢を感じるとき、路傍に林檎の樹あり、美しく熟せる林檎を見るときは、之れを取らんとする慾望生ずべし。若し此の時直に之れを得たらんには、固より斯る慾望の起る機會あるなし。然るに之れを得る迄には多少の手續を要す、即ち林檎を得んとする意志の目的を達せんが爲には、多少の障礙存す、之れ慾望の生ずる以所なり。其の手續又は障礙とは、第一林檎の樹まで歩行するを要すること、第二手を伸べて直に之れを採り得ざる場合には、何等かの器具を要し、又之れが爲に相當の時間を要すること、第三此の林檎は取りて可なるや否やといふ倫理問

題に接すること、凡て是等の事項が此の場合の手續又は障碍たるなり。又名譽を得んとする場合も之れと異なる所なし。名譽の得られんとする場合に接するや、直に之れが自己の名譽となるときは、之れを得んとする慾望の起る機會あることなし。然るに茲に若干の障碍存す、之れ名譽の慾望生ずる所以なり。

慾望には積極的慾望と消極的慾望との別あり。積極的慾望とは己れの所有に屬せざるものを新に得んとするとき、或は曾て自己の所有に屬せしも今は自己の所有に屬せざるものを再び得んとするときの慾望なり。消極的慾望とは己に己れの意志の所有に屬し居るものを、最早放たずして永く留め置かんとする所より生ずる慾望なり。假令消極的慾望と雖

も其の根本的性質に於ては、積極的慾望と異なる所なし。若し全く自己の所有となり毫も障碍なしとせば、放たじとの慾望生ずるを得ず。例へば弟もしくは妹に珍重すべき玩具を與ふる時は、之れを失はじと欲すべし、設し此の玩具にして全く彼等より離れざるものとせば、放たじとの慾望生じ得ず。然るに動もすれば兄又は姉の爲に奪ひ取らるゝ恐れあり、之れ即ち障碍にして斯る慾望の生ずる理由なりとす。

斯の如く慾望は意志の障碍に遭遇する所より生ずるものなるが、此の慾望を遂げんか爲に又意志作用生ず。斯る場合に於ては慾望が意志の動機となるなり。然るに吾人の意志は大概障碍を受けざるはなし、故に意志は多くは慾望となりて現る。初めに意志ありて慾望となり、此の慾望を遂げんか爲

に更に意志起り、此の意志も亦障碍を受けて慾望となり、結局慾望の連鎖をなすに至る。意志を慾望となすの謬見も亦斯る事情興りて力あるなり。

動機としての慾望は之れを總括せば、求樂避苦の慾望なりと云ふを得べし。而して其の重なるものは第一生存の慾望、第二名譽權力及財産の慾望、第三智識慾、第四秩序の慾是れなり。第一生存の慾は何人にも、必ず有すべき極めて普通の根本的慾望なり。然るに其の普通なるが爲に、却て平常には注意を惹かず、之れ恰も引力の理法が普通不偏なるが爲に、却て平常人の注意を惹かざると一般なり。然れども一旦重患に陥り又は災害に罹りて、身命を失ふが如き場合に遭遇する時は、此の慾望猛烈に現るべし。重き病に罹るときは、如何にして

も其の病の平癒を願ひ、假令守錢奴と雖も平素何物よりも大切にする金銀財寶を散じて惜まざるが如き、或は又地震、雷、火事、海嘯等の災害に遭ふ人が、如何にもして身を免れんとする舉動の如き、之れを見れば以て如何に此の慾望の強きかを知るを得べし。生存の慾望にも積極と消極との別あり。積極的とは現在の生活よりも一層好き生活をなさんとする慾望を云ひ、消極的とは一身を失ふ如き恐れある時、之れを失はざらんとする時の慾望を云ふ。

第二名譽權力及び財産の慾望。權力は概ね名譽及び財産と伴ひ、權力ある所には名譽及び財産あるを常とす。然るに名譽に至りては、權力及び財産と正比を保たざる場合頗る多し、慈善家教育家愛國者等の如き名士中には、却て名譽と財産又

は權力とは逆比を保つを見るなり。次に財産は名譽を伴ふよりも權力を伴ふを普通なりとす。されども財産家にして名譽權力の足らざる場合尠ならず、幸運又は悪手段によりて俄に富豪となりたるものの中には、往々見る所なり。總て是等の場合に於て名譽權力又は財産の中何れかを欠くときは、其の他に對し強き慾望生ずべし、但し或る種類の宗教家は此の限りにあらざるが如し。

自重及び自信も亦吾人の云爲行動を支配する有力なる動機にして、名譽の慾と密接の關係を有す。抑人には相當の自信自重の念あり、外面より云へば貧富又は位置の差異あれども、假令如何なる人にてても漫りに屈辱に甘んずるものにあらず、俗に所謂我慢なるものは、斯の如き自信自重より起ることあり。

り、我慢なるもの過度に失すれば固より忌むべきものなれども、然らずして且つ如上の意味を有する限りは、決して不健全の性向にはあらず。相當の自信自重は普通の性格の要件なり。自暴自棄は身體又は精神の不健全なるによるか、或は非常の逆境に遭遇せしによる所の變態なり。自信自重の念は廉耻を重んぜしめ、又己れを信ずる所よりこれを全ふせんが爲に、業務に奮勵するに至らしめ、人の人たる本領を全ふせしむるに大なる助けとなるべし。

第三知識慾。知識慾は物を知らんとする慾望にして、幼少の時より著しく現る。兒童或る時期に達するときは、頻りに質問を發し、事々物々につきて説明を求むるに至るべし。斯の如きは即ち知識慾の開發したる兆候なり。現今の學術技藝

も一部は知識慾に基きて發達したるなり。又兒童に教育を施し得る所以のものは、蓋し知識慾の存在を要件とす。第四秩序の慾。秩序の慾は亂雜を避け整頓を欲する時の慾望なり。而して此の慾望は一部は美的感情に基き、又一部は知的作用に基くなり。知的作用なるものは事物に統一をけんとする性質を有するものにして、此の統一を好む知識の性質は大に秩序の慾の發生を助くるものとす。

上來動機としての慾望につきて述べたりしが、以下少しく其の養成法につきて注意を乞はんとす。慾望教育の第一要義は慾望の目的を強大にするにあり、而して之れが爲には名譽、權力、富豪の偉大なる所を實見せしめ、學者又は藝術家の優秀なる所を實際に見聞せしめざる可からず。亞弗利加野蠻人

の文明生活を好まざるは、彼等に生來文明生活を好むの慾望存せざる爲にはあらず、其の望むべき所以を知らざるが爲なり。彼等にして若し其の生活の便利愉快を経験し、或は之れを想像する事を得ば、恐らくは文明生活の状態に進まんとする慾望を惹起すべし。凡て慾望の目的たる觀念を有せざるときは、慾望起らんと欲するも起り得ざること明なり。

前記の慾望の外に意志行爲の動機となるべき重なるものは、怨恨、嫉妬、愛情、同情の如き情緒是れなり。詐僞、喧嘩、自殺、他殺等の如き忌はしき出來事にして、新聞紙の雜報欄を富ますもの、多くは是等の情緒の動機となりたるものにならずや。同情は自然の感情にあらずして、他日己れの利益になるべしと云ふ純利己的思慮より生ずと云ひ、或は接近聯合より起る

と云ふ説あり。例へば守銭奴が金錢を何物よりも大切にす  
るは、始めは金錢其の物の大切なるにあらざりしが、金錢によ  
りて種々の利益幸福が得らるゝ所より、後には直に金錢其の  
ものを愛するに至りしものにして、之れ接近聯合に外ならず、  
同情も亦之れと等しく、同情を與ふる事によりて利益幸福を  
得、之れを得るを目的としたりしが、後には相手其の人が直接  
に同情の目的となるに至りしと云ふ。著者の見る所によれば、  
斯の如きは純然たる同情にあらず。純同情は主として類  
似聯合により、其の初發にして且つ自然なるものに至りては、  
無意の摸擬作用に基因す。

愛情は意志を左右する動機としては同情よりも遙に強し。  
同情と尊敬の情と孰れか強きか、決し難き問題なり。愛情と

尊敬の情との合したるものは即ち敬愛の情にして、愛情に次  
ぎて最も有力なる動機たるなり。

### 第二十七章 自我の意識

自我は吾人の最も確實に意識する存在なれども、さて其の  
本質を捉へんとし、其の藩圍を明にせんとするときは、いつし  
か他に移りて容易に之れを定むるを得ず。我が身體即ち自  
我なるか、之れ我が體なり、我が手足なり、我れ其の物にあらず。  
然らば自我は肉體の如き外面的なるものにあらずして、内面  
的精神作用を指すものなるか、觀念慾望感情之れ我が觀念慾  
望又は感情にして、我れ其の物にあらず。斯の如く主たり自  
我たりしもの、再び考ふるときは、客となり内容と變ず。され

ど此の客此の内容に又其の主あり、之れ自我なるが如きも、更に觀察の歩を進むるときは、前と同じ更に客と變じ内容と化する。何故に自我の主體が然かく移動するか。他なし、自我なるものは唯一不變の個體にあらず、少くとも之れに三種類あり、而も是等は何れも同一自我の三方面にして、場合によりて其の中心點の移動するによるなり。中心點が身體にあることあり、或は社會の反應又は一定の主義に存することあり。従つて肉體自我と社會自我と精神自我との別を生ず。肉體自我とは外界若くは外界の事物に對するときの身體全體を云ふ。如何にして自我としての身體が、外物と區別せらるゝかと云ふに、自己の身體は自己の意志によりて直接に運動せしむることを得るものにして、意志の支配の直接に及ぶ

範圍は之れ即ち肉體自我たるなり。外物と雖も意志によりて左右せらるゝと雖も、之れ直接にはあらずして間接なり。身體の局部及び内部には意志の支配の直接に及ばざる所あり、従つて肉體自我とは頗る疎遠にして、殆ど外物と區別し難し、爪、頭髮、内臟機官の如き是れなり、而も尙ほ肉體自我の一部分なりと信ぜしむるものは、聯想作用、推論等によるなり。意志の外、苦痛及び抵抗の經驗も亦肉體自我を意識せしむる補助要素たるなり。社會自我とは被服、邸宅又は自己の家族友人杯が強烈なる社會的反應を自覺せしむるとき、自我を云ふ。自己の所有物又は製作品が他人より賞譽せらるゝときは、何人と雖も得意となり、又之れが輕侮せらるゝとき、喪沮せざるはなかるべし。

而して是等得意又は喪沮の程度は意志の程度によりて異なるなり。例へば邸宅を立派にせんと欲し全力を盡したる場合には、稱揚されるれば天にも上る心地すべく、批難されるれば地にも入りたき心地すべし。愛兒又は親友の場合にも亦然るものあるを見るべし。或は又巨萬の富を積むを以て本願となす人ありとせんか、目的を達して富豪となるときは、無上の得意となり自己の存在發揚を自覺すべし。之れに反し設し失敗して零落するときは、喪沮の極に達し、自己滅亡して無きが如く感ずべし。然るに茲に優秀卓絶の藝術を以て本願となす人ありとせんか、假令粗衣粗食するも尚ほ清貧に安んじ、恰も自己存在の強弱虚實には没交渉なるが如く感ずべし、されども設し藝術拙劣なりとの評を受け、喪沮の極に達すれば、

自己滅亡を感じ、或は自殺をも辭せざるべし。蓋し斯る藝術家の意志は彼れにあらずして、此れにあり、此所に失ふ所あれば、自我已に亡びたるもの、外物同様の肉體を有するもせん方なきなり。是れに由りて觀れば社會自我は意志の存する所にありと云ふべし、猶ほ肉體自我が意志の直接に支配する範圍に存すると一般なり。而して自我の存亡を自覺せしむる社會的反應即ち他人より受くる毀譽褒貶なるものは、強烈なる情緒を生ずるものにして、是等情緒に主要なるものは、内部的一般感覺なり。されば又内部的に一般感覺は社會自我を自覺せしむる有力なる要素たるなり。

精神自我は之れを學究自我と情義自我とに分つを得べし。學究精神自我は學理の攻究に全力を注ぎ、原理の發見を本願



となすものを云ひ、情義精神自我は義理人情を盡さんとするを本願となすものを云ふ。精神自我は社會自我と密接の關係を有すれども、互に區別するを得。學究自我は敢て名譽權力、財産杯を本願とはせず、又往々一身の危害をも憚らざることあり、ユークリッド、ガレリオの如きは其の純然たるものなり。又孝婦貞女が親の爲め夫の爲めに盡し、或は愛國者の國難に殉ずるは、情義自我の發現にして、肉體自我及び社會自我に中心點を有せざるに於ては、學究自我と異なる所なし。以上述べたる所によりて觀れば、自我の本質は意志なりと云ふを得べし。構造本位の見解により自我の内容を云へば、自我最終の内容は不分明なる内部的一般感覺の集合體なり。著者曾て齒科治療の爲め、一種の瓦斯を吸入して人事不省と

なり、一時假死の状態に陥ち入りたる經驗あり、其の際の自我存在最終の状態を記憶す、之れを回想するに、諸種雜多の觀念去り感情消失し、今や全く無意識に入らんとする一刹那に方り、余が最後の意識は身體全體の茫漠たる一般の位置の知覺なり、之れ固より視覺上の知覺にはあらずして、極めて不分明なる内部的一般感覺の集合體ならざる可からず。自己識の最終の内容は微弱なる感情なりとなす説あれども、斯の如きは實際の經驗に基きたるものにあらず、經驗の根據なき論理的推論にして、畢竟想像に外ならず。前に擧げたる自我の主體の移轉する事實も亦、自我の主體を捉へんとする反省作用より生ず。實際の自我範圍は意志の交渉範圍によりて定まるものにして、主たるもの客となり、此の客の主たるもの亦客

となる如き移轉する自我にはあらざるなり。

前記の肉體自我、社會自我、精神自我の三種類は、機能本位の見地より發見したる區別なり。自我の中心點は是等の三範圍に分ると雖も、而も常に自我の統一を保ち得るは、意志の同一性によるなり、或は之れを意志の統一性と云ふも可なるべし。

#### 心理學補説

上來章を重ねること二十七回、其の間に論述したる感覺表象、感情などは極めて抽象的にして、且つ殆ど無限の具體の場合を包含す。已に説述したる如く吾人の心的經驗なるものは統合的一體をなすものにして、如何なる作用も單獨孤立して存するものにあらず。されども複雑なる精神作用を其の儘具體的に表出せんとせば、詩歌戯曲杯によるの外なし。然る

に是等は實際の精神状態を巧に描寫したるものなれども、説明したるものにあらず。複雑なるものを科學的に説明せんとせば、之れを分解して根本作用を發見し、其の性質及び相互間の關係を明にせざる可からず。且つ又精神作用は常に精神物理作用にして、必ず生理作用の之れに伴ふものあるが故に、心理の研究は生理學上の知識を補助とするを要すると同時に、又心理研究の結果が一部の生理研究を指導すべき知識を與へざる可からず。斯の如く相補完して始めて科學の發達を期待するを得べし。而して之れが爲には要素的、根本作用の研究第一要義となるなり。感覺の中には心理學上の經驗に促されて其の機官の發見せられたるものあり、其の他現今の心理學上確に感覺と認められるものは、必ず其の機官

存在すべきが故に、尙ほ發見せられざるものにつきては、今後生理學者及び解剖學者の研究を促さすが如き其の一例なり。以上二つの事項は心理の科學的調整を必要とする重なる理由なり。固より心理學は教育の應用に志し、又は一般の修養に資せんとするものを助くべきものなるが故に、本書中には機能本位の見地より説述したる部分尠からずと雖も、一般に云ふときは純粹科學の見地より論述したり。されば今や終結に臨み更に機能見地より補説して精神作用の具體状態に一瞥を與ふるも亦必要に屬すと云ふべし。

椅子食卓杯の如き日常の用に供せらるゝ器具より、一見吾人の生活には何等の關係をも有せざる天空の雲片、路傍の石塊等に至る迄總て外界又は外界を組織するもの之れ皆な知覺

表象なるが、是等は單に感覺と空間知覺とにあらず、何れも意味あるもの、何等かの目的又は役目を暗示するもの、我が親む所のものなり。従つて如何なる知覺表象と雖も我れには無關係にあらず、何れも我れの色を帶ぶるものにして、多少人文化せられたるもの、如き感想を與ふべし。外物の意味、目的性、人化性は必ずしも思考の結果にはあらず、知覺表象と密接に結合したる直接の意識なり。茫漠たる意識にして而も複雑なるが故に、之れを分解すること頗る難し。意志の目的となり感情の内容をなすものも亦、斯る複雑性の表象なりと知るべし。

又總て精神作用は其の動的なるの點に於て何れも意志作用に類す。感覺は主として其の質により、表象は空間と云ふ形

式によりて認めらるゝものにして、其の動的方面を表すに缺如たる所あり。作用又は過程と云ふことにより僅に之れを補ふを得たり。然るに感覺の如き單一なる經驗と雖も、強度及び明瞭の度合に變化あり、表象の如きも其の内容たる感覺に變化あるのみならず、空間上の關係堪へず變動す。其の他注意の移動と共に精神經驗の内容常に變動するが故に總て經驗の特徴は其の變動性にありと云ふべし。之れに加ふるに感情の變化及び其の感動性を考ふるときは、愈此の思想を確むべし。變動は活動の要件にして、意志の本質は其の活動性にあるが故に、此の點に於て總ての精神作用は意志的なりと云ふを得べし。

最新研究心理學畢

明治四十三年九月廿五日印刷  
 明治四十三年十月五日發行

最新研究心理學  
 定價金壹圓二十錢

不詳複製

著者 中島 泰  
 發行者 森山 章之丞  
 印刷者 香木 弘  
 東京市神田區表神保町二番地  
 東京市牛込區市ヶ谷加賀町二丁目十二番地

發行所 東京市神田區表神保町二番地  
 電話本局特長四三七、特一五三九  
 振替貯金口座東京第二三五番  
 同文館  
 大賣捌所 東京早稻田 東京市神田 大阪東區 大阪北區 朝鮮京城  
 同文館支店 東京堂 寶文館 盛文館 日韓書房

印刷所 秀英舍第一工場 株式會社 谷ヶ市區込牛 目丁一町賀加